

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年十月廿日印刷納本 昭和十年十一月一日發行

淨土

第十期 虎號



第一卷 第七號

法然上人鑽仰會發行



信仰讀本

定價 十二錢
送料 二錢

四八〇頁
六版
製上

中村辨康 著

淨土學部
宗教部長

出版界の記録を破つた劃期的名著の
増補改訂版近日出來！

本書が發行數ヶ月にして一萬部を賣り盡した近來の記録的名著であることは既に周知の事實である。

信仰への手引きをこれ程明快に、平易に取扱つた書物はかつてなかつたと云つてよい。この書が、出版界の記録を破つたのは決して偶然ではないのだ！

内 容

- | | |
|-----|----------|
| 第一章 | 悟りと救ひ |
| 第二章 | 宗教と人間の望み |
| 第三章 | 信する心持 |
| 第四章 | 信仰の本尊 |
| 第五章 | 信仰を得る迄 |

今回鑽仰會の手によつて、この良書を更に一般に普及する目的で、著者に乞ふて、更に平易に、その後の著者の思想的擴充による補ひをなし、全般に渡る大改訂を行つた。

雑誌「淨土」に創刊號以來連載せる「一枚起請文講義」の愛讀者はこの書によつて更に著者の信仰論に耳を傾ける必要がある。

◇ 發行所 ◇ 法然上人鑽仰會 ◇

國寶

右京權大夫隆信筆

原本知恩院所藏

法然上人御影

堅壹尺四寸・横八寸
絹本寫眞
精巧典雅
數十度刷

申込み殺到!! 殘部僅少

本會は創立以來、夙に法然上人の御眞影頒布の急務なることを痛感し、京都知恩院所藏にして畏くも後白河法皇の勅旨により、藤原隆信朝臣の筆になつた相好端嚴、筆致精巧を極めたる國寶法然上人御影の複製企劃を進めてゐたが、時恰も淨土宗青年會聯盟でも期せずしてこの議が起り、茲に一致協力してこれが作成に着手し、種々苦心の結果、此の程漸く完成を見るに至つたので、本會は早速全國の支部に配布したところ、果然！一般會員よりの申込み殺到のため、更に偉大なる上人の御風采を普く同志とともに拜すべく、特にこれが實費頒布を斷行することにした。

精巧無比！！神々しき上人の御影は實に眞に迫るものがあり、常に上人の人格を景仰し、念佛生活を體味到せんとする同志は、此の際至急お購めの上、朝夕座右に掲げて恭敬せられんことを敢て奨む。

一葉實費 金 壹 圓 (送料不用)

申込所

法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八貳壹八七番
電話芝(43) 一三五二・〇八四〇



◇ 浄土 第七卷 十一月號 目次 ◇

表紙……………井上正春

扉・目次カット……………青柳喜兵衛

宗教感話 念佛宗は長生宗……………文學博士 井上哲次郎 (二)

隨筆隨想 法然上人像は描き難し……………佐藤春夫 (五〇)
念佛無門……………松浦一 (六)

信仰講話 まことの愛 (青兵衛畫)……………眞野正順 (九)

珍らしい新婚旅行……………増上寺主 大島徹水 (五二)

信仰體験 一枚起請文の熱講を読むまで……………福田定雄 (六九)

佛說發句……………古萩生 (六八)

信仰と修養の講座

◆別時念佛の話……………中野善英 (三〇)



◆心 すむ歌……………二宮守人(三三)

◆座 禪 の 話……………山田靈林(三五)

小説 旅路の芭蕉……………宇野浩二(三八)

信仰相談……………(五六)

名士に 聴く 商賣繁盛のこつ……………相馬愛藏(一八)

法然上人をめぐる人々(五)

法悦にむせぶ公達……………東慈道(二一)

大衆 小説 杓子を拵へた僧誓言……………湊邦三(五八)

聖典 講義 佛説阿彌陀經……………中村辨康(七一)

▲觀月詠草……………(二九) ▲家庭の重寶……………(六七)

▲托鉢僧と但馬守……………(五〇) ▲編輯後記……………(八〇)

淨土宗管長

岩井智海大僧正述

放送

講義

二河白道の話

救心を俾る



『慾と怒で固つたこの人間』『この二つでいつもイラ〜と悩みながら暮して行く我々』——この慾と怒を捨て様としては迷ひ、これから逃れやうとしては悩む我々を、迷ひ悩みながら安樂の世界にたどりつかせ様と『二河白道』の譬をもつて平易にお説きになつた——老人でも子供でも解る大説教。

▼……これこそ現代の生きた聖典！

〔内容〕：「二河白道とは」：「開かるゝ光明の生活」：「信仰の要」：「陰陽二面の人生」：「火焰の煩惱」：「觀喜光に浴す」：「貪慾の力」：「遙かに觀る白妙の道」：「無有出離の法縁」：「攝取不捨に縋りて」——定價金五拾錢・送六錢。

東京芝公園明照會館内

法然上人鑽仰會

本誌讀者の爲め特に
本會にて取次販賣す

振替東京八二一八七番

世界的出版

國譯一切經

◇今年十二月完成

總索引共
壹百五十五卷

佛教解說大辭典

◇全十二卷今年十月完成

常盤・境野兩博士監修

新編佛教辭典

▽採録語數約貳萬・字數壹百拾貳萬・頁數壹千參百▽配列は徹底的な音便で索引なしに樂に引ける▽革製コンサイス型で使用携帶極めて便利。

定價は空前の廉價……貳圓五拾錢(送十錢)

難解な佛教術語を知るにも、又研究にもよく、大辭典と比適し得る。

辭典の界明星

東京市芝公園七ノ十

發行所 大東出版社

振替東京一九四七一番

淨土 十一月號

聞くと云ふとも、

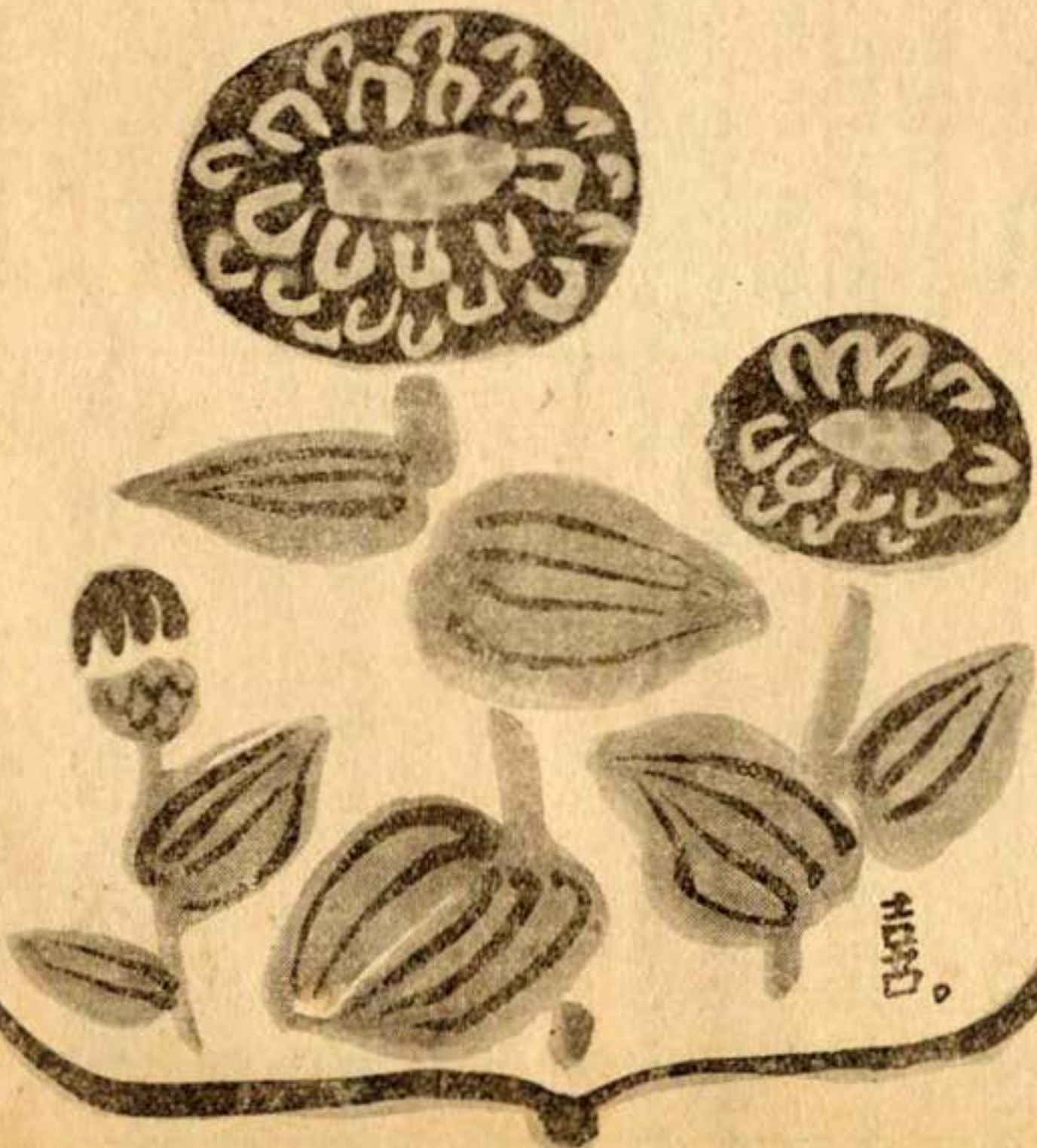
信ぜずは 聞かざるが如し。

たとひ 信ずと云ふとも、

唱へずば 信ぜざるが如し。

唯常に 念佛すべきなり。

(法然上人)



念佛宗は長生宗

文學博士 井上哲次郎

法然上人や念佛については、色々と話したい事があるが、まづその二つ三つを拾つてお話ししよう。

念佛の最も優れた力は心をなごやかにすることである。これは何よりも優れた念佛の功德である。念佛を唱へてゐると自然に心持が平和に、穏やかに、なだらかになつてくる。それであるから念佛宗の高僧達の中には、驚く程、長生きの人が多い。法然上人は八十歳まで長生きせられたが、各宗派の祖師の中では恐らく、最も長生きの方であつたらう。古いところでは傳教大師にしろ弘法大師にしろ、割合に早世であつた。傳教大師は世壽僅かに五十六歳で亡くなられた。この人は戒壇の事に關し、奈良佛教徒徳一等との論争に全精力を専注してゐたから、自然精神過勞を來し、力も盡きたのであらう。弘法大師も五十八歳にして癰を病み健康次第に衰へ六十二歳で入寂された。更に下つて法然上人の時代になつては、曹洞禪を傳へた道元禪師は五十四歳と云ふ若さで示寂してゐる。日蓮上人も六十一歳で亡くなられた。日蓮聖人は豪傑僧であつた。絶えざる鬭争に心身を捧げてゐたから心持の安まる暇がなかつたのであらうそして晩年腸胃を傷はれたやうである。

そこへ行くと、念佛門の方々は皆長生きである。法然上人は八十歳まで念佛の弘通に勤められたが、またその弟子の中にも長生きの人が多かつた。實に法然上人位ひ多くの弟子を持つてゐた組師はなかつた。その中で眞鸞上人は九十歳まで長生きをしてゐる。眞鸞上人の弟子の中にも又更に長生きをした人が多い。西念坊といふ弟子



は百八歳まで生きてゐるし、専空坊といふ弟子は百三十三歳まで長生きをしたと傳へられてゐる。本願寺の蓮如上人は八十五歳まで生きた。そして八十一歳の時に三度目の内室との間に子供が出来て、九九丸と名をつけた。つまり八十一歳の時に生れたから、九九、八十一と云ふ譯である。これはよく南條文雄博士から聞いた話である。其外本願寺三代目の覺如は八十二歳、其長子存覺は八十四歳、それから性信は初め法然の弟子であつたが後、親鸞の弟子となつた此人は八十九歳であつた。傳通院の開山聖阿は八十歳であつた。他宗でも法華の日乘、天台の天海、及び源算のやうな長壽の人もあるけれど、念佛門の方は特に著しいやうである。總じて念佛門に長生きの人が多い。昨年百三歳で亡くなられた山下現有管長の如きは現代に於いて、全く良き模範を示したと言へよう。又曾て増上寺貫主となつた堀尾貫務も九十四歳で珍しい長壽者であつた。他の宗派と違つて無理な難行をすることもなく、心の高ぶる論争をする事もなく、平和に念佛を勵み安心を得る功德であるに相違ない。念佛宗は長生き宗と言つてもよいであらう。

前にも述べたやうに、法然上人には他の宗派の祖師方に比べて澤山の弟子があつた。この多くの弟子達はほんとうに上人の徳を慕つて集つてきた人達である。法然上人は自分の徳の力で自然に宗旨を弘めた人である。政治上の勢力や財力を頼つて教を弘めたのではなく、徳の力で自然と弘まつたのである。日蓮上人は豪傑僧であつて、曾て法然上人を蟲と云つた。撰時抄に「日蓮は眞言、禪宗、淨土の元祖を三蟲と名づく」とあるが、法然上人は何人をも嘗らない有徳の僧である。たゞ其の徳の力だけで澤山の弟子を引き付けて、自然と教が弘まつたと云ふ事は、日本佛教史上に誠に珍らしい事と言はなければならぬ。

淨土宗は現在でも宗祖の風格が躍如として動いてゐるではないか。宗門中穩やかな人達が多い。他の宗派には



随分闘士もあり、論客もあるが、浄土宗の學者は殆ど穩かである。穩か過ぎて催眠状態に陥つてはならないから浄土宗の學者は自ら鼓舞作興することを忘れてはならない。然し兎に角浄土宗には今日諸宗派の中でも大變優れた學者が多い。荻原雲來君、故渡邊海旭君など、云ふ人達は元と私と深い關係ある學者である。もと大正大學が浄土宗高等學院と言つて、傳通院の山内にあつた頃のことである。私はあそこで今の浄土宗の大先輩達に對して屢々講演をしたものである、當時の校長は黒田眞洞さんであつた。あの人は良い人だつた。あの人が人材を見抜く明があつたのであらう。秀才の教育には餘程骨を折つたから、荻原、渡邊の外に、椎尾、望月、矢吹、大村など云ふ人達が輩出したやうである。

浄土宗の學者で思ひ出すが、故渡邊海旭君は偉らかつた。渡邊君が今居たら随分能く働いてくれたであらう。惜しい事をした。私はあの人の念佛を聞いた事があるが、念佛もあゝいふ風にも唱へられるものかと思つて驚いた事がある。及川智雄君の葬儀の席であつたが、まるで肛の底から湧き上つてくるやうに、力強く太い聲で「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と唱へたのには驚いた。まるであたりを壓するやうな念佛であつた。念佛といふものはあのやうに元氣よく力強く唱へなければいけない。大抵はか細い育で陰氣臭く唱へてゐるが、あれではない。これからの人達はさういふ事にも餘程考へを廻らして、時代を明るく導いてゆくやうに心掛けねばならない。

宗教も昔の儘ではいけない。法然上人が念佛を弘められた當時には、實によく大衆の要求に應じられた。それであるからこそ大衆は自然として靡いた。上人は時勢を見抜かれた活眼の人である。宗教は時勢の行くところを見透して一世を指導しなければならぬ。國民の要求を満たしてやらぬからこそいかゞはしい似而非な宗教に走る者だの、三原山へ赴く者が現れるのである。



時勢は移る。こゝ約三四十年来の自然科学の進歩は誠に目覚ましいものがある。最近では自然科学と哲學との區分が段々取り除かれて來たやうな状態である。従つて科學と宗教との接近と云ふ事も不可能ではなくなつてゐる。電子論、量子論などから哲學に入つて行く者もあり、宗教を論ずる者もある。獨逸では何と云つても、ベルリン大學のマックス・プランクが最も注目すべき人で、新量子論を説いてゐるハイゼンベルヒ之に次ぎ、デンマークのボーアなどの説は現代の自然科学の研究では最も進んだものの一つであらう。それから相對律の創唱者アインスタインは今は米國に移住して居るけれども、元と獨逸の生れで又ベルリン大學に教鞭を執つたこともある。此人は其後もなか／＼奇抜な學説を發表して學界を驚かして居るが其空一元論などは餘程佛教哲學を再認識せしむるやうな感なしとしないのである。又英國に於てはエディントンの、ジョンスだの特に注目すべき學者である。ジョンスは不可思議世界を論じ、エツデイントンは神祕的宗教を論じて居る。そしてデイラツクも電子研究に於て一頭地を抜いて居る。斯様に自然科学の研究が進んだ結果は、物質と意識との境界がなくなつてきた。尤も是れは小物理學（ミクロフイジツク）範圍内の事である。現代の宗教はかういふ自然科学の目醒しい進歩にも絶えず注意を怠らず、時代人の要求に應じなければならぬ。物質研究の結果が意識の領域に多大の影響を及ぼしてきたといふ事は種々宗教家を警發するに足るのである。阿彌陀佛を説くにしても、勿論宗祖上人の教から出ることとは出來ないであらうが、説明の仕方は時代人に理解の出來るやうに、自然科学の斬新な學説なども参考して創造的態度に出るがよいであらう。如何に長生宗であつても武陵桃源の情眼を貪つてはならない。

念佛無門

大正大學教授 松浦 一

支那南宋の理宗皇帝則位の日に無門慧開禪師がお祝ひに作つて献上した「無門關」は大變に結構な禪門の書物であることは申すまでもありませんが、この無門は固より淨土の大門でもありますので、私はその事を此處で暫く申してみたいと思ひます。

「無門關」の第一則は有名な「趙州狗子」といふ公案になつて居りますが、それはかうです。

趙州和尚因に僧問ふ、狗子に還つて佛性ありや、也た無や。州云く、無。

趙州和尚といふ唐代の名知識に或僧が何かの折に尋ねて見た、「狗子にも佛性があるものでせうか、ないものでせうか。」

すると和尚は「無」と答へた、といふのであります。「一切衆生悉有佛性」といふことは佛の教としては常に言はれてゐることとあります。或僧が狗子の様子を見て、あれでも佛性といふやうなたいしたものゝが本當にあるのかしら、と思つたのがこの公案の中の間となつたものでありませう、狗子ならばまだしもです。だににたかられ弱りぬいてゐる人が、だににも佛性があるのかしら、と怪しむこともあるでせう。微菌に生命までも、蝕まれてゐる人が、その菌にも佛性があるだらうか、と訝ることもあるでせう。狗子に佛性の有りや、無しや、を疑ふこととあればこそ、問の姿の美しきだけに左程に強くこの問の響かぬこともありませう。「一切衆生悉有佛性」の天地を貫く佛の師子吼を向ふへ廻しての大きな疑問、これに答へて趙州和尚は一語「無」とのみ言はれたのです。この「無」は「なし」と讀んではいけません。問の伸びた「なし」ではない、唯一喝の「無」であります。唯一聲の「無」であります。此處には有無を論議する何物もありません。「ある」の「なし」といふことは相對的の小さなものです。或は、やがては離れる合せ物です。「無」の一聲は絶對です。「無」の一喝は糊附けではないのです。この一喝

に、この一聲に、有無の疑念は微塵となつて虚空に飛んでしまひます。その後には何があります。嵐の後の晴れ渡つた空のやうな淨らかさが法身の中に於て涼しく見られるばかりです。これが淨土の出現です。「趙州狗子」の公案の後にある無門禪師の評語の中には、

只者の一箇の無字、乃ち宗門の一關なり。

とあります。この一箇の「無」の字、この一喝の「無」この一聲の無が、唯一つ禪門にある門となり、これが見性の門となり、これが成佛の門となります。さうすれば、淨土への門もまたおのづからこれなのです。

「無」といふ門、この大門は「有」「無」の二つを糊附けし、或はこれを引きはがした所に見られるものではなく、私が前に言つた如く、法身の中に於て涼しく見られる境地です。それ故にこの門は門と言つても畢竟は無門。即ち「無門關」の序の頌には、

大道無門、千差路有り、此の關を透得せば、乾坤に獨歩せん。

とあります。乾坤に獨歩し得たらば佛の境涯。佛の道を行く者は悉くこゝに至る大道を一樣に行く者です。さうして、

この大道には首尾よく佛果を得る者のいやでも通る門があります。この關となる門は無門。「無」に依つて成る門です。「趙州狗子」の公案で見たあの「無」に依る門です。大道の門は無門、而も又その岐路はといふならば、それはく、澤山にある。即ち、「大道無門、千差路有り、此の關を透得せば、乾坤に獨歩せん。」

私は「大道無門」を「無門關」の無門の處で見ました後で、「念佛無門」といふことを述べてみたいと思ひます。

無門をして無門たらしめる一箇の「無」の字、一喝の「無」一聲の「無」が、成佛の門となり、淨土への門とおのづからなるといふことは、上に述べて置きました。念佛はと云ひますと、即ち成佛の門であり淨土への門であります。成佛の門淨土への門と云へば、往生といふことも直ちに思ひ合はされませう。この身が佛になりきること、淨土そのものになりきること、それは淨土に生れた後の生活の事に屬し、人の思議をも許しません、此處はそれへの門なのです。成佛の門なのです。淨土への門なのです。往生淨土も、念佛も、此處の門のことなのです。

成佛と往生淨土との間にはおのづから區別のあるべきこと

は例へば法然上人は願眞法印にかういふことを仰せられた。

成佛はかたしといへども、往生は得やすし。道綽善導の心によれば、佛の願力を強縁として、亂想の凡夫淨土に往生す。(「勅修御傳」第十四卷)

成佛の果は人間のはからひの彼方にあり、而も往生淨土のことは如何なる凡夫も念佛の力を以て達せられる。その願眞法印が姨の禪尼に送つた手紙の中には、

われ佛を念ずれば、佛我を照し給ふ。光明我をてらせば、罪障きえずといふことなし。藥王樹にふるゝものは毒なれどもくすりとなる。光をかうぶらんもの、たれか罪障ののこりあらん。かくばかりやすき行を、無數劫のあひだ思よらざりけるかなしさよ。(同上)

此處の言葉を以て云へば、念佛とは佛の光にあたることです。氷が日光に溶けるやうに、我れの障礙がその光明にあたつて消えてしまふことです。唯それだけです。これ程にたやすい事は人の世に容易にはありません。「かくばかりやすき行を、無數劫のあひだ思よらざりけるかなしさよ。」——今の世でも幾人がこの感慨を繰返すことでせう。佛の光に照されて一切の障礙の氷が消えうせてしまつた後では、この身はどの

やうになるのでせう。それは成佛でありませうと、又何でありませうと、尋ねるまでもないことです。「無門關」の趙州狗子に鳴り渡る「無」。これです、唯これだけです。念佛の大道は無門です。

念佛の大道は無門です。往生の大道は無門です。佛への大道は無門です。法然上人が熊谷入道へ御遺はしになつた御返事にかういふ御文があります。

御文くはしくうけ給はり候ぬ。か様にまめやかに大事におぼしめし候らん、返々ありがたく候。まことにこのたびかまへて、往生しなむとおぼしめしきるべく候。うけがたき人身すでにうけたり。あひがたき念佛往生の法門にあひたり。娑婆をいとふ心あり。極樂をねがふ心をこりたり。彌陀の本願ふかし。往生はたなごゝろにある也。ゆめ／＼御念佛をこたらず、決定往生のよしを存ぜさせ給ふべく候。何事もとどめ候ぬ。

此處にある「往生しなむとおぼしめしきるべく候」の有無を絶する「無」の一聲、「往生はたなごゝろにある也」の一切の疑團を碎いた「無門」の一喝。私は此處に黙して、無門の門に佛を念ず。



まごとの愛

——勝鬘夫人の話——

眞野正順

わが國文化の祖と仰がる、聖徳太子が、はじめて御叔母、推古女帝の爲に、宮中で、嚴かに講ぜられた經典は「勝鬘經」です。この經は、印度阿踰闍國王妃、勝鬘夫人の深い信念の世界を説いたものでありまして、佛教精神による女性の道が、こゝに示されております。しかし、茲に述べやうとする「勝鬘夫人」はその勝鬘ではない。その母に當られる憍薩羅國波斯匿王の王妃末利夫人の事蹟です。末利は、梵語で翻譯します。やはり「勝鬘」となりますので、母と娘と、同名異人だったのです。

(一)

明るすぎる印度の朝の太陽が、その日はもう中天に近く、ざら／＼しい光を、緑青色の樹々の葉に漲らせてゐる時でした。伽毘羅衛城の街外れに、醇蒼とした庭園に圍まれた地主大名の邸の廣い森閑とした臺所の入口に、ふと小さな影を落した十四五歳の少女がいました。遠い田舎から出て來たばかりらしい鄙びた着物の所々も擦れ、埃が汗にねばりついた額の下から、恐／＼と眼をあたりに動かしながら

そこに暫く立ち竝んで立つてゐました。

少女は、この大名の領してゐる遠い村落から來たのです。彼女の父は、その村の管理を命ぜられてゐた村長でありましたが、ふとした思ひから永い臥床につき、その療病の資のために、都に送る租税までも費ひ果し、其上なほ多くの借財までも残して、つい七日ばかり前に死んでしまつたのです。

二人の子供をかゝえた老妻の悲嘆は、目も當てられない有様でしたが、それにも増して重大なのは、残された山のやうな借財の始末でした。近隣合議の結果、寡婦と男兒は村から追放と定まり今年十四になる娘の明月だけは、その借財の償ひが出来るまで領主の家の婢女として一生働きつゞけに働かねばならぬ事となつてしまつたのです。

遠い旅路の埃に塗れ、いま、しよんぼりと大名の邸の臺所に來た。明月は恐づくと薄暗い臺所の奥を見ますと、その片隅で何やら鍋で煮てゐる老婢の姿が見えます。聲に氣がついて振向くとチロリと冷たい眼を明月の姿に注ぎながら

「あゝ、今度來ることになつた田舎者だね。どうせ、お臺所の用には足りない。すぐ裏に行つて花を摘んでおいで、そして奥様の

華鬘を編むのだ」

と云つたまゝ、復たくるりと彼方を向いてしまいました。明月は仕方なく、埃だらけの足を引擦りながら、裏庭に出て一生懸命そこらの花を摘んで華鬘を編みました。そして、それを老婢に渡しました。

翌朝になると奥から出て來た老婢は、明月を見ると云ひました。「フ、お前は、お前はお譽めに預かつたよ。お前の作つた鬘は花が夥りあつて好いとさ。今迄は、私が作つて上げてたのだが、年を老ると眼が霞んで少ししか花が探せない。お前は若くて眼が、いゝから澤山さがせる。これからは毎日、華鬘はお前の受持だよ」やがて、奥からも明月を呼びに來て、夫人の前で譽められた上、これからは、名の明月を改めてマリカと呼ぶやうに云渡されました。

マリカと云ふのは「勝れた鬘」といふ意味でした。

(二)

こんな譯で、その名を改めた勝鬘は、その後は、朝になれば、園に出て花を摘み、夕になれば水を汲んで食器を洗ひ、一日々々は、こうして何時か過ぎて行きましたが、心は決して浮立つて來ませんでした。昨日までは、とにかくにも町長の娘として部落

の大勢から尊敬の眼で見られてゐた自分は、今は、しがたい嫌女となつて、埃に塗れて水を汲んでゐる。然も、この身に背負つた借財を支拂はなければ、一生かゝつても此境遇からは脱けられない。身體も生命も共に買はれてしまつた奴隷なのである。

来る日もくも心鬱く、ある朝も、花桶を擁えて門を出てゆきますと、ふと、路の彼方から、黄褐の布に身を纏つた一人の僧が、胸のあたりに威儀正しく鐵鉢を捧げて、靜かに歩んで來るのに逢ひました。勝鬘は、ふと幼い頃から自分の家の習慣であつた「施」がしたくなりました。然し、今日すつかり貧しくなつてしまつた自分の身には施す物とは何一つありません。しばらく躊躇してゐた末、ふと自分の手首にはまつてゐる腕環に氣がつき、急いでそれを外して僧に近づいて鉢の中にかかりと落しました。ちよつと立留つた僧は、暫く勝鬘の顔を見つめてゐましたが、やがて低く

「善い施しをなされました。」

と云つて靜かに眼を瞑りました。それは、丁度、あの大象の清らかな眼が靜かに閉ぢられてゆくのを見るやうに、なにか奥知れず澄み透つた深い寂けさの中に引入れられてゆくやうな淨い心持を勝鬘に與へました。少女は、何やら「ほッ」とした安らかな氣持になつて、やがて過ぎゆく僧の後姿を見かへりながら、園の中

に入つてゆきました。

(三)

草叢の中に入つて、小半刻も花を摘んでゐた時でした。急に、荒々しい蹄の音が大地に響いたかと思ふ間もなく、突然、荒れ狂つた奔馬が一騎、金色眩しい鎧を装つた立派の武士を乗せたまま、園の中に奔り入つて來るや矢筈に、武士を草の上にドツと投げ落し、林の中に馳け入つてしまひました。

勝鬘は、思はず叢から駆け寄つて、武士を抱き起しました。

武士は、豪氣な笑を滿面に造りながら、勝鬘に云ひました。

「靴を解いてくれ、少し疲れた。」

勝鬘は甲斐々々しく靴の紐を解いてやりますと

「女、この邊に水はないか。足が洗ひたい。」

「ハイ」

勝鬘は、傍にあつた花桶を擁えて、急いで林の間を馳けぬけて、池の傍に來ました。そうして、桶を水に沈めながら、ふと思ひました「足を洗ふには温い水が善い。疲れがとれる」そう氣がついて池の彼岸の陽の當つてゐるところの温い上水を靜かに汲取つて、いそいで武士の處に歸つて來て、其足を優しく洗つてあげました。

「いゝ氣持になつた。もう少し汲んで来て呉れ。顔を洗ふ。」
 また、池の傍に来て、顔を洗ふには、餘り温かくてはいけな
 と思ひながら、池に手を差入れて、温かい上水と、冷たい底の水
 とを靜かに攪けまわして、汲取つて歸りました。すると、武士
 は、今度は

「飲む水を呉れ」

と云ひました。ふたゝび池の傍に來た彼女は、飲むには冷たい
 ほど好い、と考へ、今度は足を捲つてさぶ／＼と池の深味に入つ
 て行つて、桶を水底深く沈めて、底から湧いてくる冷たい清冽な
 清水を汲上げ、蓮の青葉をち切つて、その上に注いで、武士に献



げました。眞青な蓮葉の凹みに、輝き透る
 清冷な水を、息をもつかず美味しそりに吞
 み乾た武士は、末利に問ひました。

「この園には、泉が三種あるのか。」

「いえ、一つ池があるきりです。」

「では何故、さつきから三度とも水は變つ
 てゐたぞ。」

問はるゝまゝに勝鬘は、一つの池から三種
 の水を汲上げた譯を話しました。武士は暫
 らく少女の顔をちつと見凝めてゐました
 が、やがて満足そりに、もう少し、この園で
 懇んで行きたいと、希望もしましたので、
 勝鬘は立つて園の草亭に案内し、窓を薄暗
 くして褥など用意し、やがて自分は何と思
 つたかそうつと脱出して、手早く園の門扉

を堅く閉め切つて、錠をかけてしまひました。

一時すると、やがて大勢の軍馬の騒がしい音が街路に響き、口々に「波斯匿大王は見えぬか」と探してゐる聲が聴こえます、その音に目を覺まして、むつくりと起きた武士は、暫らく耳を澄して、傍の勝鬘に云ひました。

「あれは僕の臣下達だ。なぜ、此所に入つてこぬ。」
「園の入口を閉めてしまひました。」

と答へますと、王は急に眼を鋭くして「なぜ」

と、身體を起しながら問ひました。勝鬘は

「あの、妾は父から聴いております。武士には必ず何處かに敵があるものだといふ事を。ですから、獨りでお寢になつてゐる所に、知らぬ人を入れてはいけないと思つたのです。」

と答へました。武士は頷いて立上り、門を開かせて「王は此處に居るぞ」と云はせました。

すると、狩獵の姿をした大勢の兵士達が一時に、この園の中に集まつて来て、恭しく武士に一禮しました。この武士こそ、隣境の大國憍薩羅國の波斯匿王であつたのでありまして、一日狩獵に出た途上、乗馬が荒れて、計らず、大名の園に入つて來たのでありました。

大勢の臣下に圍まれ、再び馬上の人となつた王は、振向いて、

さつきから茫然と叢の中に立つてゐた勝鬘に向ひました。

「お前は、此處の娘だらう、何と云ふ」

勝鬘は、うつむいて

「いえ、娘ではありません、勝鬘と申します娘です」

王は暫く、ぢつて勝鬘の姿を見つめてゐましたが、やがて臣下を促して靜かに園を出てゆきました。

(四)

これが、薄幸の少女勝鬘が、一躍して憍薩羅大國波斯匿王の第一夫人と仰がるに至る端緒でした。勝鬘の明敏なる才智に感じた王は、國に還ると、やがて、使臣をして山の如き禮物を携え、大名の許に訪ねさしました。大名を初め一家の者は、王が嫡女勝鬘を妃とし迎えたい意志のある事を聴かされた時は、たゞ驚倒するばかりでありましたが、兎角こゝへやがて準備の日も過ぎ、吉日は選まれて、今は美しく其天與の麗姿に輝きを添へた勝鬘は、大象の背に備へられた目の覺めるやうな、輝く輿に揺られながら、大勢の武臣に護られて、大名の門を出てゆきました。その時の光景が、古經典に、こんな風に描寫してあります。

「……すなはち城隍を嚴餌し、衢路を掃灑す。勝鬘女もろもろの瓔珞を具え、大象に載る。康莊の處に於て、鈴を搖りて、遍ね

く劫比羅城のあらゆる人衆、或は諸方より集り來れる者に告げて曰く

「應に知るべし。釋種大名の女、號して勝鬘と曰ふもの、い

ま送りて憍薩羅國勝光大王のために第一夫人たらんとす」

城を擧げて人衆咸くみな送りて出づ。時に勝光王、廣く軍を備へ儀禮して歸國を迎ふ」

憍薩羅の首都、舍衛城に入つてからの勝鬘は、貞淑明敏の譽高く、はじめは其出身の賤しいのを忌んだ大王の母も、やがては誰れよりも深く勝鬘を信頼するやうになり、數多い妾妃の中から選ばれて、王の第一夫人たる榮譽を持つやうになりました。

既に王城の主として雲の如き臣下に傳づかれる身となつた後にも、勝鬘の思ひ起すことは、あの大名の園に佗びしく花を摘んでゐた頃でした。それにつけても、あの朝、自分の腕輪を捧げたあの氣高い僧の姿が思ひ起される。其後、夫人は臣下と伽毘羅衛を遣して、その時の行乞の僧を尋ねさせたところ、其服裝によつて、それは佛陀敎團に屬する僧であつた事が分りました。それで、遂に、釋尊を憍薩羅に迎え、國を擧げて其法を聴くこととなり、夫人はやがてその信仰に入り、常によく僧を供養したので、經典にはしばしば「供養第一」を以て讃えられております。佛教

も、こゝに善い外護者を得て、次第に廣く憍薩羅國に擴布するやうになつたのでした。

(五)

勝鬘夫人の篤い信仰は、遂にまた國王をも、佛教の信仰の中に導き入れる事となりました。その經緯が、また一篇の物語となつて經典の中に残つております。

その頃、釋尊がこの舍衛城の祇樹給孤獨園に滞在せられてゐた時でした。林樹の下で、釋尊は二三の弟子達に取圍まれて話をし、てゐられますと、そこに一人の男が入つて來て黙つて其一隅に座りました。それを見て、釋尊は

「何か、心に落つかぬことがあるかな。」

と問はれました。男は釋尊の顔を見て、何か憤らしく

「ありますとも、世の中は無茶苦茶だ。」

と云ひました。聞いて見ますと、其男の一粒種の愛兒が急に死んで終つたのだそうです。つい此間まで健康に育つて來たのに、ぼつくりと死んでしまつたので、諦め切れず、もう飲食も喉に通らず、仕事も手につかず、たゞ斯うして彼方此方を歩いてゐる。昨夜も家に歸らず、子供の墓の側に行つて寢たのだと云ふので

釋尊は頷いて、靜かに

「それであらう、それであらう、愛はかならず惱みを産むものだ。」

と云はれました。すると、男は目を立て、

「なに、愛は惱みを産む、そんなバカな事を。あの兒を可愛がつてゐた頃は、あんなに楽しかつた。」

「いや、その可愛いと思ひつめる心に、惱の根は、もう張つてゐるのだ。譯らぬか、それなら……」

と釋尊が言ひかけると、男は急に立上り

「愛は惱みの根だと。そんな愚なことが……」

と、頭を振りながら、出て行つてしまひました。そうして道路

に来て男は「あの沙門の言ふ事は確かに間違つてゐる。誰かもつ

と頭腦の好い奴に聴いて見てやらう。」と思ひますと、世間で一番

頭の善い者は相場師だといふ事が氣がつかしました。なぜなら、他

の者が皆な歸郷と働いてゐる中に、彼達だけは頭を働かすだけ

で、何時も贅澤な生活をしてゐるからです。それで、男は相場師

の集つてゐる所に来て、愛は本當に惱の種であらうかどうか、と

質問しますと、相場師達は振向いて云ひました。

「愛が惱の種だと。何を吐かす。可愛がりや楽しいからこそ女子

も抱くのだ。アハ、ハ、ハ、」

男は、全く然うだと思つて、街に出て、この事を人々に話して、大笑しました。

(六)

この事がだん／＼傳つて、王城の中にも聴えて來ました。波斯匿王もそれを知つたらしく、ある日、夫人に向つて笑ひながら

「お前のお師匠さんも、拙いことを言つたものだね」

「何故で、御座います」

「釋迦は、愛は惱だ、と言つたそうぢやないか。厭世主義も度が

過ぎるね、だから、此町の者達の信用をすつかり落しちやつた。」

「いふ、それは世尊の言はれた通りだと思ひます。この町の人達

には、未だよく世尊の教の深い意味が分らないのです。」

「また初まつたね。釋迦といふと、お前は、すぐに肩を持ちたがる」

「いえ、王様……」

と云ひかけて、夫人は振返つて、室の彼方に薄絹の蓋を透して

輝く銀色の寢臺の中に、美しい顔を此方に見せてすや／＼寢息を

たてゝゐる幼い王女、婆夷利を見て、續けました。

「王様、この婆夷利はお可愛い」

「なに云ふ。可愛い／＼に定つとる」

「なに云ふ。可愛い／＼に定つとる」

「では、この婆夷利が、病氣にかゝつて苦しみだしたら、どう、御心配なさる」

「云はんでもものこつちや」

「御覽遊ばせ、婆夷利を可愛いと思召せば思召すほど、その時に、御心を御痛め遊ばすでしやう。愛が深ければ深いだけ、惱みも深いのです」

王は黙つてしまいました。そこで、夫人は言葉を續けて

「世尊は、何時も、かう仰せられます。愛は惱を産む。然し、かやうに惱を産むところの愛は、實はまだ本當の愛になつて居らない愛なのだ。本當の愛には惱はない筈である。たゞ淨い喜びがあるだけだ。人はいつも誤つた愛をしてゐる故に、その愛から惱が産れる。」

「愛は、愛するわが相手と自分と一つになりたい心と云へやう。」

だから、愛する者を何時までも自分に引つけ離れなく思ふ。然し、この時、實を云へば、其人は本當にその相手の爲に愛してゐるのではない。自分の愛欲のために、相手を自分に引つけ自分のものとしやうとしてゐる。つまり、相手を自分の愛欲の道具にしやうとしてゐるのだ。だから、相手が自分から離れて行かうとすれば愁ひ、悲しみ、泣き、怒る。然し、本當に、相手のために泣いてゐるのではない。自分が自分のものを喪ふことを悲しんでゐるのだ、と仰せられました。ほんとに……」

夫人は、ふと黙つて王の眼を見上げ、微笑しながら手を差出して王の掌の上におき

「世の中で王様は、誰れが一番好き」と尋ねました。王は苦笑しながら

「まあ、子供としておくかな」

「ではないでしやう」

「……」

「ほんとに王様、世の中で一番好きなのは御自分でしやう」

王は、黙つて夫人の顔を凝視しました。夫人は續けて

「本當の事を云へば、誰れでも、一番好きなのは自分ではないでしやうか。子供が可愛い、臣下が可愛い、と云つても、深く考へつめて見れば、あたし達は、それが無くなれば、自分の生甲斐が無くなることですわね。自分の爲に人を愛してゐる。淺ましいやうですけど、妾だつて然うなのです」

「……」

「ですから、可愛いものは、自分の中にいつかと取込んで少しも離すまいとする。すつかり自分のものとしておかなければ安心しません。相手が少しでも自分から離れて行きそうに思はれると、すぐに怒つたり泣いたりする。」

ですから、愛は相手を縛つてしまふ。我兒は可愛ければ可愛い、何時までも、自分の思ひ通りにしておきたい。大事な品物は、庫の奥深く藏ひ込んでおかなければ安心が出来ない。愛せられたものは、必ず、身動もならぬほど握みつけられてしまふ。そして伸々と其天分む伸してゆくことを障けられる。愛慾は必ず、相手を憊まして來るのです。

そうして相手を苦しめてゐる内にも、また世の中は、その自分の愛慾の思ふ通りに行つてくれません。寄つたものはきつと離れるし、在つたものは、何時かは無くなるし、愛は必ず愛し得ぬ嘆きに逢ひます。

このやうに、愛慾は、自分とその相手を苦しめる。ですから「愛は必ず憊を産んでくる」と世尊は仰せられたのです。そうして、こんな愛は早く捨て、本當の愛に入らねばならぬと仰せられるのです。」

「それなら、どうすればいいのだ」

「世尊は仰せられました。本當の愛を知りたかつたら、あの病兒を看護る母親を見よ。母はわが身は痛まないのに、愛兒が身悶えすれば、わが身が裂かれやうに思ひ、兒が微笑みでもすれば、我を忘れて喜ぶではないか。此時の、母は、自分を悉く愛兒に捧げて、いつか愛兒自身になり切つて終つてゐるのだ。こゝに自の

ら、人間の中に潜む本當の愛の片鱗が現はれておる。

眞の愛は、相手を自分に取込むことでなくて、自分を相手に與へて終ふことだ。己を空にして、相手に與へ、相手自身になり切つて、相手を高めることにのみ務める。そうして相手が高まることに依て、自ら自分を高められてゆく。こゝに本當の愛がある。この愛は、我慾を中心としておらぬから憊みはない。たゞ相手の喜びによつて、盡きせぬ淨い喜びの世界に入る。

己を空うして、兒に與へ、夫に與へ、更に博く、臣下に與へ、人民に與へ、このやうに果てしなく擴がつてゆけば、その愛の中に包み込まれるものは、すべて、喜びながら、悉くまた自分のものとなる。

勝鬘よ。人の眞の道は、かゝる愛の中から初まつて來るのだ。王者の愛は、またかやうな愛でなければならぬ、と仰せられにりました」

暫らく聽入つてゐた王は顔をあげて

「そうか、それ程までに、お前が佛陀の教をよく聞いてゐたとは知らなかつた。まつたく其通りだと思ふ。儼もこれから佛陀の弟子になる」と云つて、頷きました。

かうして遂に、波斯匿王も夫人と共に佛陀の教を受ける事になりました。



商賣繁昌のごつ

—— 誠心と温情 ——

新宿中村屋店主 相馬 愛藏

渡邊海旭先生の力で佛教信者に

私は廿歳代の時キリスト教の洗礼を受け、今でもキリスト教と縁があるので教會へ出かける事もたまにはありますが、現在は佛教信者で、娘の葬儀も佛式で行ひ、家庭では讀經もし、讃仰歌も唱ひ、毎月、日をきめて信仰座談會など開いてをります。それもキリスト教の教理が佛教におとるからとか、佛教の教義の深遠さを理解して佛教信者に轉向したとか云ふのではないので、一寸した機會からなのです。先年英國官憲の壓迫から東京で憤死した外國語學校の講師

アタール氏の葬儀を自ら進んで引受けて下された故渡邊海旭先生と相識つてからなのだ、まあ渡邊先生の温情に感じ、お近付をし、次第に佛教精神を味ふ様になつたからです。そして法然上人の偉大な人格をお慕ひしつゝ、自分も亦信仰を養ふ事が出来るからです。教義や理窟をぬきにして直接人格に觸れて行く事が肝要と思つてゐます。私が、佛教に入つたのも、僧侶中に立派な高僧がおいでになるからで、其の方々から御指導を受けたい爲めです。

商賣繁盛のコツは主人の人格

商賣でも同様で商人の人格を高める事が最も大切です、利益の爲にお客様の感情を害しては商賣はおしまひです。

私の知人で盛岡の方に温泉宿の株を買った人があります。

その宿屋が又非常に繁昌して益々發展してをるのですが、其の主人の妻君が自ら乗出して萬端經營する様になつて、或る日、主人が私を訪れまして、

「相馬さん、いくら男が威張つても、流石女は偉いですな。

私が監督してゐる時には全然わからなかつたのですが、妻が來てからと云ふもの、随分無駄をしてゐる事を發見しましたよ、冬一月で炭を八十俵も無駄にしてゐたんです」との話しです。

一寸なる程と思ひましたが、よく考へてみると其の無駄が商賣繁昌の基だつたんですね。東北方面の温泉は自炊しながら逗留してゐる客が多いので、寒い時、よく起つた炭のサービスは特に難有く感じるわけで、炭八十俵の損害が繁昌の原因だつたので、八十俵の資本は僅かなものですが、其れと同じ時に湧き出る客への親切さが、物を云つたわけですから。其の主人にも早速その事を話した所、早速歸つて妻君を監督しなければ一大事だ、と云ふ譯で、大笑ひをした事がありました。女は商賣が細か過ぎるので失敗する例があります。先日

福島へ新しく呉服商を出した者に云ひ聞かしたのですが、呉服屋など一尺の布を一尺二寸に勉強して賣るコツはなか／＼女には出来ない、此の點商店の主婦は大いに自重する必要があります。店が小さければ小さい程勉強しなければ駄目です。

店が小さければ従つて品數も少い、客の方では、澤山の品からよいものを撰り出す事が出来ない譯で、大店と同じ定價だつたら客は大店へ行くでせう。東京の小賣商はデパートとの對抗で大騒ぎをしてゐますが、小店の方にもなか／＼認識不足が多いのです。小店で牛罐を五十五錢で賣つてゐる、客が來て、「デパートでは此と同じものを五十三錢で賣つてゐる此の店は高い」と云ふ。「デパートは仕入が多數で廉價だから定價の安いのはあたり前ですよ」と云ふ主人がある。これでは客はデパートへ買ひに行つてしまふ、デパートは仕入が安いが經費が大變である、品數の少い、古い品のある小店では、デパートと同等或は其以下の價で賣る可きです。

此の場合デパートで五十三錢なら私の店では五十錢で賣りませうと云へば、客はデパートへ行く前にその店へよつて下さると思ふ。あの店はデパートより安く親切に賣つてくれると云ふ信用を得る事が大切なのです。

其の信用は店が示すのではなく、その主人、主婦が示すので、信用は主人の人格を充分に披瀝して初めて得られる譯です。正札主義販賣により大發展を遂げた百貨店が同業者間の無茶な競争から、三割引とか、景品付賣出しで客を引く傾向があります、其は百貨店の長所を失つたものです。然し正札主義を守ると云ふ事はなか／＼困難な事で、一旦定めた値段を頑固に主張するのが正札主義ではないので、最善の努力と研究の結果賣り出され、飽く迄も廉價に提供してをると云ふ自信と、誠意が定價の内に現れてゐなければならぬ譯です。

良品を安價に提供するには

それなら良品を安價に提供し而も利淳を擧げるには如何にす可きかと云ふ問題になるのですが、私の経験から申せば、獨り商賣に限らず、何の經營でも、一國の政治でも、結局は人間がするので、勝れた人物を多く集めて快く働かせるのでなければ甘くは行かない、良品を廉く賣るには此の點を最も注意す可きです。

店の創業時代、夫婦だけで働いてゐる頃には模範的の商店

が、大勢の人を使ふやうになつてから急に人氣を失つた例が尠くありません、店の不統制、亂雜の責任は實に主人にあるので、主人たるものは常に虚心坦懷、飽く迄公平に、親切な可きです。俸給手當でも主人の誠意の現れたものでなければなりません。私の店など俸給は極く少額です。然し妻帶する時とか、子供が生れた時とか、老人のある場合など、出来るだけの手當を與へるつもりです。食事等も出来るだけよいものを平等に與へます。飲食店、菓子店等で店員の食事を冷遇した爲め思はない損害をした例も屢あります。

店員に不平不満があり、不正がある店でお客に好感を與へる事は絶対に出来ません。利益配當、福袋等の制度も能率増進の點で大いに必要です、然し更に一步を進めた根本問題は人格尊重と智徳教養の二點です。此れが行き届けばお客に對しても充分の誠意を示す事が出来る様になります。商賣かけ引の上手は對手の足下につけ込んでの儲けである、などと思ふのは、人格を全然無視した考へです。客に對する誠意、店員に對する情をなくして商賣の繁昌は成立ちません。

以上私の経験から小々申し上げたのですが、事業の根本には人格の向上、信念の培養が最も大切です、私も今後益々智徳教養、信念確立の理想に向つて進みたいと思つてゐます。



法悦にむせぶ公達

— 平重衡の一生 —

東 慈 道

南都の業火

「重衡を呼べ！」

清盛は怒氣を強く含んで近従を大喝した。

平家の大軍が富士川の陣に敗走したのはほんの一ヶ月許り前ではあつたが、次々に源氏は諸國に蜂起する氣勢を見せつゝある。さしも全盛を誇り望月の缺けたる事なきを誇つてゐた清盛も、衰運の一路を辿る平氏の運命を如何ともする事が出来なかつた。それに加へ

て南都の僧徒は悉く清盛の命に背く。強氣に強情を押し通して來た清盛だけに、事毎に己が意志に反する事許り生じて來るこの頃は氣のみいらだつて怒り通してあつた。

「重衡はまだか！ 早くせい！」

今日は殊の外、御怒りも激しかつた。それは南都の僧都が平家から派遣した檢非違使を殺し、あまつさへ大きな鞠丁の玉を作つて「之は入道相國の首だ」と罵詈謗しつゝ群集の前で蹴散らしたと云ふ噂が耳に達したからであつた。

「重衡殿が御見えになりました」

近従の聲と共に息せき切つて現はれたのは、眉目秀麗な白面の公達であつた。

「御父上、火急の御用とは」

「南都征討の軍を起すのぢや。」

豫期してゐたとは云へ、單刀直入に云はれると愕然とせざるを得なかつた。

「重衡、父の苦衷を察してくれ、京洛の人々からは平氏の無力を笑はれ、その上南都北嶺の坊主共迄も嘲弄するのじや。こゝで平家の武力を斷として示さねば、この清盛が何の面目あつて天下に會はす顔があらう。重衡！ 追討の大將となつて南都の坊主共を殲殺してくれ」

人々から平氏の無力を笑はれる事は清盛にとつてたへられない侮辱であつた。逆上した清盛は途轍もない大暴舉を重衡に強ひた。遂に巡の色をほのかに見せた重衡は、ジツト父の顔をのぞきこんだ。

「重衡、父の爲いや平家の爲に立上つてくれ、あの宇治川のおん身の働きを以てすれば易々たる事じや」

哀願せん許りの父の涙聲を聞き乍ら、白面の公達は伏目勝である。

昨年兄の重盛が薨じて以來、父の御計ひはやゝ度を失つてゐた。御

白河法皇の幽閉、叡山の征討、遂にはあまりの暴狀にたまりかねて

源三位頼政は以仁王の平家追討の令旨を戴いて兵を擧げた。宇治川

の戦に頼政は敗死したものの、これを兆として頼朝の擧兵、富士川の平氏大敗、世情は極度に騒然となつて來た。京洛の地は毎日家財を負つて逃ぐる人々に溢れてゐる。たまりかねた父はやけになられて福原の遷都を斷行せんとされたが、既にそれだけの力は平氏にはなかつた。憔悴した父は再び京都へ歸つて來られた。重衡の頭の中を去來するものはこの一ヶ年間の目まぐるしい世の變轉であつた。

「何をためらうのか、清盛の子とも覺えないぞ」

煮えきらぬ重衡の態度に業をきらした清盛は滿面朱を注いで怒喝した。

「はあ！」

何の不自由もなく成長した重衡には父の暴惡をとりひしぐだけの堅固な意志はなかつた。むしろ悪い事とは知つてゐても、父の悄悄狼狽のさまを見ると南都征討に氣が傾いてくるのであつた。父から強壓的に命ぜらるゝまゝに御前を退下するより仕方なかつた。

それから數日の後、重衡は三四千の兵を率いて奈良へ到着した。

木津川の川風も一入寒さを覺ゆる冬の初であつた。ことゝくに反抗する南都の僧徒は追討の軍を見ると尙さわめいた。平氏に對する罵詈雑言と侮辱とはくまなくまき散らされる。重衡も遂に意を決して一擧

に奈良城と般若寺の城廓とを陥れんとして、暗夜を利用して近所の民家に火を放たしめた。折から起つた物すごい烈風は火をあふつてみる／＼うちに一面を火の海と化した。大蛇の舌かと思はれる猛火は

次から次へと建物を呑んで行く。遂には東大寺、興福寺の大伽藍に迄火が及んだ。廣大な建物而も勅願によつてたてられ、歴史を誇つた大伽藍も瞬く間に猛火に包まれてしまつた。

「勿體ない」

「佛法破滅じや」

「末法」

僧徒は餘りの出來事に膽をつぶして自失してしまつた。腰の抜けた老僧、佛罰の恐ろしさに戦いてゐる者、燃え續ける佛ともろともにと猛火の中に身を投げ入れる者、阿修羅の世界か、焦熱地獄の世界か、驚大動地の有様に奈良の山々は氣も狂はん許りであつた。業火は廣まりに廣まつて七大寺以下悉く灰燼に歸してしまつた。

「王法も佛法も破滅じや、火災を逃れんと東大寺に避難した一千餘名の人々は死し、勿體なくも金銅十六丈の毘盧遮那佛は御首がおちてしまつた。この世に生き長らへてこの慘狀を見るとは何の業報ぞや」聖武天皇御手づから建立遊ばされ、寺復興せば天下復興せんと迄御誓ひ給ひしこの寺々を、燒きはらふとは何と云ふ暴狀ぞ。」

「何時の日か必ず佛罰は彼等の頭上に下り魔界に墮せしめるであらう」

「そうだ、そうだと」

人々の集まる處では必ずこんな言葉が交はされた。京都に父を喜ばしたい許りに意氣揚々と凱旋した重衡の耳がこれを聞き洩らす筈

はなかつた。戰の興奮から靜かにさめてみれば坐ろに佛罰の恐ろしさが考へられて來た。罪業深き己が身が恐ろしくなつて來た。何の憫も知らなかつた朗かな公達も、日一日と憂愁の氣に深く包まれて來た。

修羅より法悦へ

それからあはたゞしい四ヶ年が過ぎ去つた。清盛は佛罰の故かその翌年の二月に悶死した。清盛なき平家は滅亡の淵に迫ひやられるのみで、今や都をも棄て、一ノ谷の難險に倚つて範頼・義經の軍勢を迎へる事となつた。

元暦元年三月七日夜明、關東にその人ありと聞えた熊谷直實を始め平山の武者所季重等の剛の者は一の谷の前方に廻り、海道から攻め寄せ、「源氏の先陣」と聲高らかにどう一つと押しよせた。衰へたりとは云へ平氏もさるもの、「好敵御座んなれ」とおうと迎へたる者は惡七兵衛、尉景清、飛彈の三郎左衛門、尉景綱等の二十三騎、木戸口を開いて颯とよせかへす。劍の双音と雄々しい叫聲、海を背景として白旗と赤旗とか入亂れて相戦ふ。やゝ源氏不利と見ええたか、熊谷は傷つき、季重の郎黨は討ち取られた。

この日に重衡は東門の副大將を承つて、褐色に白と黄色との縋で岩群れかふ千鳥を繻ふた直垂に、裾へと紫を濃くしたをどしの

鎧を着けて、鍬形打つた兜の緒を締め、黄金づくりの太刀を佩き、背に二十四の截生の矢を負ひ、負ひ手に滋藤の弓を持ちたる凛々しい装束に、金環輪の鞍置いた名馬鹿毛に股つた姿は、敵も味方も一目惚れする程の颯爽たるものであつた。

やゝ優勢を誇つてゐた平氏は矢張り落ちゆくものであつた。思ひもがけない義經の鶴越の奇襲は、手薄い背面に敵を受けて攪亂されてしまつた。平氏は度を失ひ散を亂して海へと逃げのびて行く。重衡も乳母の子である後藤兵衛盛長を連れて須磨の海岸を白砂の渚の方へ落ちて行くのであつた。緑濃き松と白き砂の中を立派な装束と名馬に跨つて落ちて行く二騎の姿は繪の如く美しいものであつた。源氏の者が何條これを見送さう。



「あすこに落ちゆくはゆかりある平氏の大將と覺えたり」と梶原源太景季と庄の四郎高家とは、馬に一鞭逃してはとまつしぐらに追ひかけた。明石の浦に近づいた頃、あの名馬では追ひつき得まいと考へた梶原は、南無弓矢八幡大菩薩、神がけて重衡の馬を狙つて遠矢な放つた。どうと倒れてふり落された重衡を見るや、捕はれてはかなはじと盛長は重衡を見棄て、逃げ去つてしまつた。「落目になれば従者迄も見捨てしまふ」意志の弱い重衡は逃げ行く盛長をうらめしさうに自失して眺めてゐたが、追つ手は身近に迫つて来る、自殺して生捕りの屈辱から逃れんと、倒れし馬を起してうち跨り、海へ乗り入れた。が、海は遠淺、それに瞬間呼びさまされた生の執着に逡巡してゐた處へ、

高家に追ひつかれてとらへられてしまつた。平家の公達らしいあつけなさではあつたが、いかにも意志の弱い世の苦勞を知らぬ重衡らしいおだやかさがあつた。

京都に入つてはなすこと見るもの總べて重衡の心を傷めないものはなかつた。朝廷ではさすがに平氏の體面を重んじて、平家の大将達の梟首は止すやうにとの御沙汰があつたが、義經の頑強な主張はとう／＼獄門にかけられる事となつた。重衡もそれ等の首級と共に萬人の嘲笑の中に都大路を引き廻はされた。昨日迄は平氏に非ざれば人に非ずと豪語した者共が、今日はかうして罪人としてさらし首に會つて道行く人の嘲笑の的となつてゐる。死した首級はまだしも生きて恥を曝す重衡の心中は迂濶にも生捕りとなつた自己が憐れになると共に、轉た、諸行無常の感を深くした。その上風流に生きた重衡には自己のみすばらしさがつく／＼いやになつて、幾度死なんとしたか判らない。併し、その中に一筋の希望があつた。それは南都の大佛を焼いた罪業最も深き自己を、一度さらけ出して吉水の法然上人にすがらんとした望であつた。重衡を預つてゐた鎌倉の家人土肥二郎實平は重衡の心に同情して、早速左馬丞友時を吉水の庵室に遣はした。上人は快よく使の話を聞かれるや、金剛草履に檜笠の何時もの姿で土肥二郎の宿舎に重衡を訪れられた。重衡の喜びはこの上もなかつた。

「全くお恥しい姿を曝らして面目もない次第であります。南都の諸

佛を灰燼に歸したこの重衡死しても償えぬ重い罪業を持つ身でありますれば、地獄に墮することは必定ではありますが、どうかこの重衡に今生の別れの言葉を頂きたうございます」と

と涙ながらに訴へた。

「これは／＼以ての外。かつての飛ぶ鳥も落す第一門の繁榮と今とを比べますれば、餘りにも悲慘な變化と思ひめすかは知れませんがこれも諸行無常、盛者必滅の理であります。何時迄もかくあると考へるのが人間の煩惱であります。決しておなげきになり、お怨みになるべきではありません。殊に南都大火の罪業を深く御心痛の程に見受けられますが、これとて既に懺悔滅罪せられて、佛法を求められ、後世を慕はれてゐる今日、諸佛もなかお赦し遊ばされない事がありますか。まして私の信ずる所によれば、罪はいかに重くともたゞ念佛だに申せば阿彌陀佛の大願力により往生致すは必定にてございます。」

南都の僧都から惡魔、阿修羅と迄罵られた重衡がこの温かい言葉を聞いた時、嬉しさの餘り人目も憚らず泣き伏してしまつた。暗い憂愁に閉ざれてゐた彼の心にも如來の廣大な慈悲が一道の光明を注ぎ入れた。思はず稱名の聲すら胸の中から起つて來る思ひがして信心に開けたのであつた。今生に於て頼るべき人はこの御坊一人のみと重衡は喜びの色を滿面に浮べて歡喜勇躍した。上人は靜かに立上つて剃刀を重衡の頭にあて、三歸戒と十重禁とを説かれた。

「何と云ふ法悦であらうか、御上人様の神々しさ、今生の人とも覺えないと重衡はもう飛び立つ喜びに今迄の苦惱も愁歎もけし飛んだ心持がした。」

「上人様、これが今生のお別れかは知れませぬが、只今の法縁を以て、來世の得脱のお力におなり下さいますようお願い申し上げます」

「いや／＼あなたこそ西方の淨土をお明し下さい。再びお會ひ致しませう」

問ふ者も答へる者も涙にむせんで、限りない彌陀の大慈に浴したのであつた。この時、重衡は形ばかりの御微と云つて平家重代の家寶である名現「松蔭」を上人に贈つてお別れを惜しんだ。

關東下向

其後、土肥の宿舎から義經の下に引とられたが、法皇から

「御身若し書を宗盛の許へ贈つて、三種の神器を返上させる事が出来ればお生命だけは助けてとらせよう」

と勅定があつた時

「幾許の身、助命はお願い致しませぬ。が勅命だけは謹んでお受け申します」

と答へたが、その言葉には既に信心の決定した稟とした氣風が備

はつて奥床しく偲ばれた。併し宗盛は法皇の命に背いたので重衡は孤囚として鎌倉に護送される事になつた。

元暦元年三月下旬、梶原景時に伴はれ京都を出發した。昨日の榮華も今では夢幻の如く思はれ、藍褶の直垂に引立烏帽子の惨めな現實の姿にはさすがに暗然たるものがあつた送る人も附添人も重衡の心情を察してか、ものうい眼に憂愁の陰を宿してゐる。太く含んだ櫻の蕾も心なしか萎んで見える。

併しとぼ／＼進む悲しい道程も、法然上人の稟々しい教訓に慰められつゝ、さして苦しいとも思はず日數を重ねて來た。京都を立つて幾日目か、濱名の橋を渡つて池田の宿に着した時は日もトツブリと暮れて、夕月が夢から浮び上つたやうに、うすばんやりと出てゐた。この宿の長者熊野の娘はかね／＼優雅な重衡の噂を風の音づれに聞いてゐたが、こんな高貴の方に御目にかゝれるとは千載の喜と宿舎に訪ふた。併し、そのいたいけな御姿を見ては、涙のみ先に出て限りない哀憐の情に打たれてしまつた。

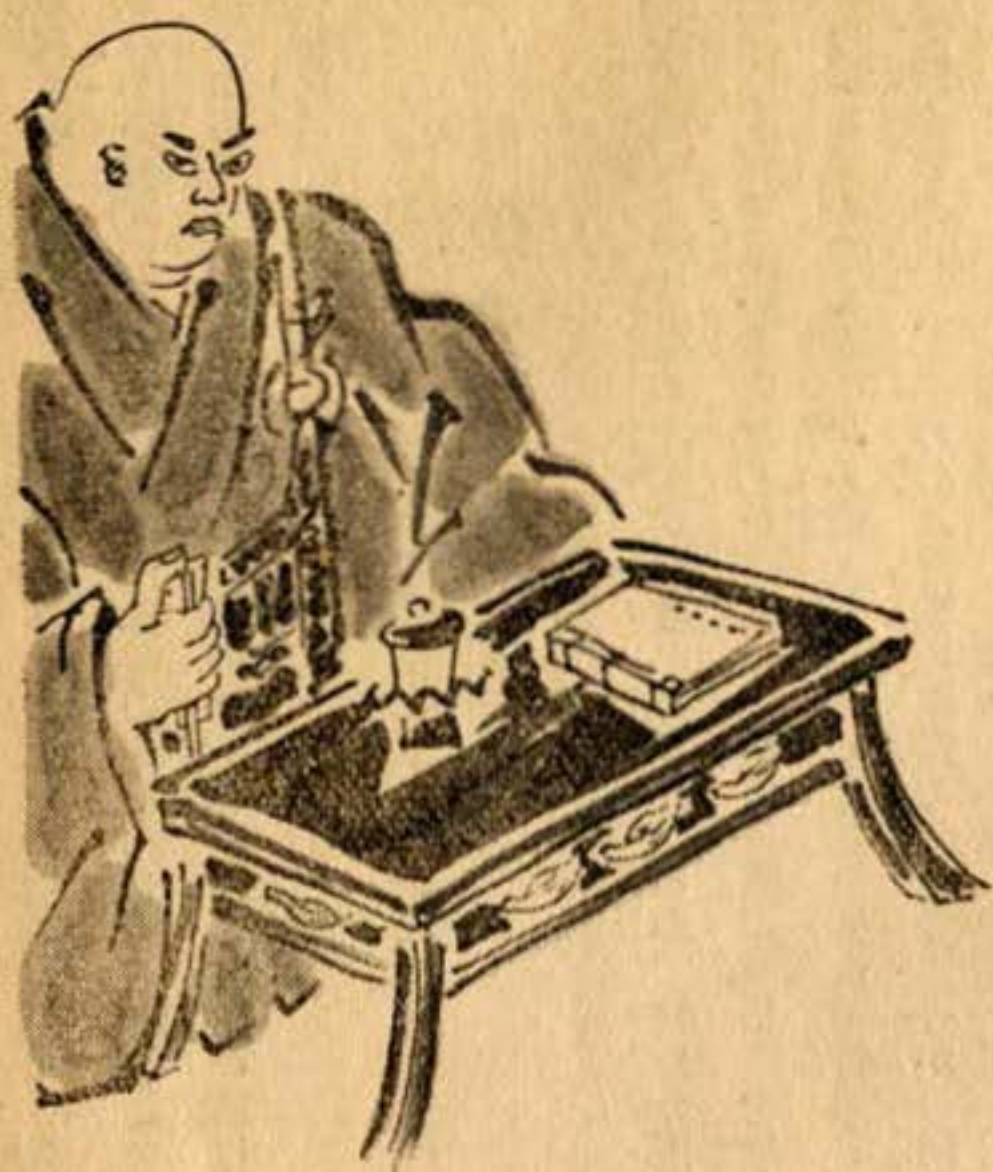
「慣れない御道中、さぞかし御心勞の事と存じます」

と辛じて口にする事が出来たが、せめてもの御慰めにと

旅の空は赤土の小屋のいぶせきに、故郷いかに戀しかるらんと一歌を捧げた。重衡はこの娘の可憐さにニツコリと笑ひながら

故郷はこひしくもなし旅の空、都もついのすみかならねば

と返歌して上人から示された心の安心を吐露した。それにしても



西海の汐風に身をさいなむ老母、屋島の荒風に身をさらしてゐる妻の身の事を案ずると胸の熱くなるのを覺えた。

足柄山を越えて大磯小磯の海を眺めつゝ鎌倉に入つたのは、新芽の緑にむせぶやうな頃であつた。頼朝の面前に通された重衡は、もう昔の意志弱き公達ではなかつた。法然上人によつて與へられた心の光明は重衡に落着きのある風格を與へてゐた。

「このたび天子の逆鱗を慰めまゐらせんが爲に、且は父の恥を雪がんが爲に、石橋山の合戦を企てゝより、恰も掌を返すが如く易々たるうちに平家の暴逆を鎮定した。而もかく拜眉の榮を得たるは頼朝の面目この上もない。更に宗盛殿に面謁することも近きに在ると存ずる」

さすがに今や隆々たる勢を保てる頼朝は群臣を睥睨しつゝ堂々と初對面の挨拶をした。

重衡は既に恩愛の道を脱した安心の人。泰然自若としてゐるびれもせず口を切つた。

「昔は源平俱に朝家の御警衛を承つてゐましたが、この頃我が家ののみ獨り朝廷に立つて天下の政をいたし、一族の朝官に列する者八十餘人、榮華の連綿たること二十餘年に及びました。然るに今や運命つきて囚人となり、かく參上の上は、とかく申すべきにはあらず。弓矢取る身が敵の爲に捉はるゝことは止むを得ぬ事で、この上は急ぎ首を刎ねられて、身の暇を賜はられよ」

と顔色も變へず聲高らかに云ひ切つた。冷淡な頼朝も名門の子のこの凛々しい言葉を聞いては思はず同情の念を起さざるを得なかつた。なみゐる關東の荒武者も昔の重衡の身を思ひ浮べて鎧の袖に涙をぬらした。

悲戀の宴

さすがの頼朝も、重衡の立派な態度に打たれたのか、狩野介茂光の許に預けて、手厚いもてなしを命じた。特に重衡の淋しさを幾分でも紛らはしたいものと千手の前と云ふ麗るはしき侍女を侍らして萬事を世話せしめた。千手の前は重衡の孤獨の寂しさに心から同情をよせたが重衡の優雅な姿と物なれた態度とは強く彼女の心に銘せられた。關東の荒武者には似ても似つかぬ風雅なたしなみ、それに加へて哀愁をおびた風貌は、忘れがたいものとなつてしまつた。重衡も何くれとなく心よく世話してくれる千手の前、殊に髪は長く眉目艶にして色白き姿は、彼の淋しさを癒してくれる唯一のものではあり、心にくからず思ひはしたが、今は囚人、何時果てるとも知らぬ身の事を考へれば諦めるより外に道はなかつた。或日千手の前は思ひきつて問ふてみた。

「若しも助命にでもなれば如何がなさいますか」
「出家して俗縁を離れたい」

重衡は法然上人を思ひ浮べてキツパリ答へた。千手の前はそれを聞いて恨めしく重衡の顔を見つめてゐたが、耐えられなくなつて泣き伏してしまつた。

其後、頼朝は旅空の徒然を慰めてやらうと、前に重盛に仕へて重衡をよく知つてゐる工藤祐經を始め藤ノ判官代邦通等に命じて宗茂の館で一夕の饗宴を張らしめた。千手のすゝめる琥珀の美酒を傾ける重衡は昔の豪華な生活を思ひ浮べはしたが、法然の教に心の惱を拂つた今は、何の淋しさもなかつた。法然の言葉に従つて彌陀の慈悲に包まれてゐる事を思ふと心中何の蟬まりもない。皆と一緒に面白く夜を興じた。宴の酣になるに従つて祐經は鼓をうちて今様をうたへば、千手の前は琵琶を弾じた。重衡もつと座を立つて

「某が後生樂の爲に」

と五常樂の曲を吹き、次に

「このたびの身の上、明日をも知らぬ命じやほどに往生急じや」

と戯れつゝ皇鷹の曲を吹いた。彼の心中には欣求往生の念が滾々と湧いてゐたのであつた。夜も更けるまゝに皆歸宅しようとする

「一寸お待ちあれ」と留めて

「燭は暗し數行處氏の涙。夜は深し四面楚歌の聲」

と聲高らかに朗詠を吟じた。急に一抹の淋しさに打たれたのか、詩に托して自己の胸中を訴へた。外には春雨がしと／＼と降りそぼつてゐる。一同は重衡の胸中を察して、さこそと涙に咽んだ。千手

の前は殊に泣きぬれて何時座を立つとも知れなかつた。

重衡の最期

かくする程に南都の僧都からは「佛敵をかへせ」と頻々と鎌倉へ使者が送られて来る。政略に長けた頼朝は遂に重衡を南都に護送する事に定めてしまつた。千手の前の嘆きは一通りでなかつた。「これも前世の因縁。」と慰めて重衡は鎌倉を出で奈良へと向つた。途中、山科の近在日野の里で、警護の武士の情けで妻に別離の言葉をかけた。餘りの變りはたてた良夫の姿に哀しみ嘆いてゐる妻を見ては、重衡の心は亂るる許り

「昔は子供のない事を嘆いてゐたが、今は子供のないのが幸じや何時變るとも判らぬのがこの世の中じや。何事も諦めてくりやれ」言葉も少なに、髪をかき別け口先の及ぶ所を少しかき切り「遺物じや」と差し出す手もふるふる許りであつた。妻は用意してゐた給の小袖に淨衣を添へて出すと、喜んでそれを身につけた。そしてせきかねて涙のかゝるから衣、後のかたみにぬきぞかへぬると妻の差し出す紙にしたため、

ぬぎかふる衣も今はいかゞせん今日をかぎりのかたみと思へばの妻の返歌を後に聞き乍ら淋しく去つて行つた。

重衡が到着するや南都の大家は「憎き佛敵」よとひしめき合ひて酷

刑に處せんとしたが、やつと思ひかへして武士の手に渡した。流も清き木津川の畔に近所から迎へて來た阿彌陀佛を砂の上に安置して一心に合掌し、現世の深き罪業を懺悔し、法然上人の御言葉通り念佛の聲高らかに首を刎ねられた。この立派な往生にはさすがの南都の大家も感動して、黒衣の袖をぬらした。

程經て、重衡落命の報が鎌倉に傳はるや、千手の前の嘆きは一通りではなかつた。世の儚さにたえかねた彼女が亡き重衡の菩提をとむらう爲に尼となつて、鎌倉から美しい姿を隠したのはそれから幾許もなかつた。

「觀月」詠草

— 爛々詩社葵句會合同にて —

和多田 一郎

月影に出島の漁村かゝやけり

行正 獨庵

名月を浮べてゆれて流れけり

細井 小濤

破れ案山子捨てたるまゝの實りなか

寺西 飛水

御神火の三原の月の薄曇り

井上 田老

山の田の案山子は裾のなかりけり

信 仰 と
修 養 の
講 座

別 時 念 佛 の 話

皮を脱げ



中 野 善 英

念佛も一皮、脱がなければいかぬ。
人間も一皮、ぬがなければいかぬ。
蜜柑も、皮のまゝでは喰へぬ。一皮ツルリ
とむくと、中から美しい肌が出る。あのよう
に「人間の皮をツルリと一皮むくのが、念佛
です、信仰です。」

蟬でも、蛇でも皮を脱ぐ。あれが土の中か
ら出て来たまゝの蟬であつたり、又昔のまゝの
一尺五寸の蛇であつて皮を脱がなんだら、い
つまで経つても、一尺五寸であつて、終に大
きくなることは出来ぬ。一皮ぬぎ、二皮ぬい
で行くから、その度に大きくなつて行くので

す。

人間も偉そうな、生意氣な、知つたか振りの面の皮を被つてゐる。或は徳者振つたり、或は金持振つたり、或は善人振つたり——その面の皮を、慚愧懺悔してツルリと一皮ぬがなければ美しい肌は出ぬ。そして、その時本當の「人間美」「眞實の自己」が出来るのです。それをいつまでも「自己の月」を出さずに、雲で隠して、よさそうな顔を粧つてゐる。そのニヤケた面がいかぬのです。その卑しい根性がいかにぬのです。

念佛申してゐても、博士さまになつてゐても、ドコに透き徹つたような美しい人格者がある。氣高い崇高味がある。皆、腹の中には一杯毒瓦斯を溜めたきりで、口でだけ滔々と千萬言を羅列してゐる。それよりも其毒血と黒い肚糞を一遍に吐き出して見よ。腹の中がガラリと開けて、千層敷のような廣さになる。徳本上人が多年念佛申してゐられて、或る時「洞然として、古桶の底が抜けたような……」氣がしたと云つてゐられる。そしてそれか

らは「願に念佛の妙處」を會得したと仰せてゐられてゐる。あれ程、念佛一行に徹して苦行精進せられた徳本様も、初めは、どうかして有難いお念佛が申したい。お念佛で有難くなつてみたい……などと、色々求めてゐられたらしい。それが或時、此の洞然として古桶の底が抜けたように感じてから、初めて、ガラリと「舊い念佛」が捨てたり、「古い自己」が捨てたつて、「新しい念佛」の世界、「新しい自己」に生れ更はられたのです。

底抜け、底抜け、人間の底を抜け！

底のある内は、二升櫃であつたら、二升の飯しか遣入らぬ。三升の飯櫃であつたら、三升しか入らぬ。ボンと底をぬいて、底無しになつた時、初めて、どれだけ入れても、入らぬといふことなく、又どれだけでも無限に底の方から出て来る。それがお念佛の世界です。無量壽、無量光の世界です。コセ／＼した、小賢しい、いやらしい人間に終るのでなく、その「人間臭」の皮をスツポリ一皮脱いでみると、本當に、快潤な、屈托の無い大天地が

ある。ココから無限の力が湧く、縦横無尽の智慧が出る。これが「他力」といふものです。

これからの世の中は、

一、頭(Head)が働き

二、心(Heart)が働き

三、手(Hand)が働かねばならぬ。

その第一、頭——知識は、念佛することによつて不思議に獨創的な観智が授つて来て、我れながら素晴らしい傑作が生れる。學究の上にも、或は商賣の上にも、實に面白い發明が生れる。これは信仰のお蔭であると思ふ。第二に心——人格の上に温い親情が添つて来て、自然に人から好かれ、尊ばれるようになる。これも信仰の徳です。世には學問もあり、地位もあり乍ら、毛蟲のやうに嫌はれる人がある。これはよく見ると屹度、信仰が無く、愛情のない冷たい邪惡な人間であるからだと思ひます。第三に念佛すると意志が練られて、努力家、奮闘家になつて、辛棒強く修練するから、自から手腕家になり、必ず他人より一頭地を抜くようになる。即ち、

一、頭——頭腦が明晰になり(研究—信)

二、心——心が親切になり(愛情—愛)

三、手——仕事を好んで、よく働くようになる

(勤勞—望)

の三つが、自然に調和し、よく發達する。これが念佛の功德であり、別時念佛の効果である。

昔は、法然上人も日に二萬三萬の唱名を相續して居られながらも、尙ほ、自己の淺間しさに飽き足らず、別時念佛を修せられた。そして終には建久九年正月には六十六歳で三昧發得せられたが、我々の如き凡俗の徒輩には、こんな好相觀見や、三昧發得の爲めには兎ても別時修行は修せられぬ。要は生活の整調であると思ふ。即ち此の信、愛、望の三作用が振興して、明るく、正しく、強く、自己生活が確立し、社會生活が明徴になつて行くが爲めである。

眞實の價値は「祈り」の中からのみ現はれる。眞實の文化の向上は「祈り」によつてのみうち建てられるのである。(おはり)

心すむ歌

大正大學教授

二 宮 守 人

寂莫の苔の岩戸のしづけきに

涙の雨のふらぬ日ぞなき——新古今集

これは吉野金峰山の笹の岩屋に籠つた日藏上人の歌であるが、近くは冷泉爲恭の『尊勝陀羅尼明驗錄』にこの歌の芦手繪が載せられ見るからに心澄みわたるを覺へた。

この寂莫といふ言葉を和歌によみ入れた日藏上人は、特に文學的技巧からしたのでは無く、無心に極めて自然に、この漢字がこの和歌に調和するかせぬかを斟酌する餘裕もなしに、口づさまるゝまゝを歌つたものである。そこに此歌が千載の下なほ寂莫の絶韻を人の心に高鳴らせる力をもつてゐるのである。

たゞし、この寂莫の文字は單なる漢字や單たる漢文學の智識を以て解釋し去られたのでは却つて無意味なことになる。『新古今集』の註釋書の何れもこのことに觸れてゐないのは我が國文學界の爲に惜しいことだ。

日本文學に寂莫といふ言葉を教授したものはこの歌であるが、この歌の作られる爲には日藏上人の笹の岩屋に籠つての修行が必要であつた。この行から生れた歌といふ事が、先づ注意せられるべきで、この行が無ければこの歌は生れなかつたのである。然らばこの行は何に依つて生れたかといふに、これぞ『法華經の法師品』にとくところのものである。法師品の歌は同じ集に、

法師品加刀杖瓦石念佛故應忍の心を——
深き夜の窓うつ雨に音せぬは

うき世を軒のしのぶなりけり——寂蓮

とあるが、この歌は法師はどんな刀杖を以て傷つけられても、瓦石を投げつけられても心中に佛を念じてゐる事によつて、これを堪忍する事ができるといふ經文の原意を、特に念佛のところだけを、うき世を逃れると翻譯した所に妙味があるのであつて、又實に上の寂莫の歌の意味と相通ずるものである。

深夜に窓を打つ雨の音がどうした事か音を立てない。それは軒につるしてある忍草に雨足がうけとめられてゐる爲である。どんなつらい事でも忍ぶの意味にかよはせてある。それが忍び得られるのは憂き世をのいてゐるからである。即ち笹の岩屋といふ深山の奥にかくれ住む決心がついたからである。この憂き世をのく事がとりも直さず念佛なのである。念佛故應忍を——憂世をのきの忍ぶなりけり——と意譯した寂蓮の宗教的理解力に敬服せ

ずには居られない。

さて、日藏上人の歌の寂莫の文字の出典であるが、無論それは法師品中のものであつて「寂莫無人聲、讀誦此經典、我爾時爲現清淨光明身」とあるもの、それである。

空すみて心のどけきさ夜中に

有明の月の光りをぞ待つ——選子内親王

とふ人の跡なき柴の庵にも

さし来る月の光りをぞ待つ——俊成

山ふかき柴の庵のしづけさに

法をとなへて住む心かな——寛海

人しれぬ山がくれの法の水

すめるとほそは月のみぞ訪ふ——實陰

草の庵に聲も心もすみぬらし

人のかげせぬ光をぞ見る——慈鎮

ひかりなき谷の戸ながら靜なる

心より見る月をまちえて——後柏原院御製

等この經文の心を歌ふたものは澤山ある。

こゝに始めて寂莫の意味が盡される。故に寂

莫といふ言葉の作者といふ事になれば『妙法

華經』の譯者羅什三藏であると云ふべきであ

り、これを日藏まで傳持して來た唐法華傳、

本朝法華傳、往生傳中の人々をこれが傳持者

と見、その後に至つて始めて國語として、和

歌の中の用語になつたと見るべきである。

さて寂莫に心をすますとは、たゞ少乗佛教

の所謂五停心觀の如く、たゞ心が外界の誘惑

に打ち克つて、何時も停止して動かぬと云ふ

種類のものとは、凡そ格段の相異なるもので

ある。寂莫は決して人の心を乾からびさせる

ものではなくして、未だ嘗て觸れたことのな

い深刻なる感激を呼び起し、そこに止めども

なき人生感激の涙を流させるものである。即

ち「涙の雨のふらぬ日ぞなき」と歌はれてゐ

る所以である。たゞし此の涙は決して世俗的

のものでなく、澄み切つた心のメークアップ

に流されるものである。入重玄門の涙であ

る。故にこの涙は直ちに佛の説法の御聲でも

あり、また佛身より放つ光明でもある。

寂莫の暗なればこそ、明晃々たる心月輪が

輝き、寂莫の沈黙なればこそ、餘獸の聲をひ

そめさせる大獅子吼が聽かれるのである。明

暗と説默とその差別を超越したかなたの世界

にのみ、寂莫の涙かながされる。寂莫は單な

る無相空寂ではない。

やみ晴れて心のそらに澄む月は

西の山べやちかくなるらむ——西行

心にかゝる暗雲もなく、一切皆空の無心澄

淨の境致に咄々何等の奇怪ぞや、西方極樂淨

土の妙莊嚴たちまちに展開し來り、妙音樂、

妙香味まのあたりに充満し來るのである。小

乗佛教の單なる五停心觀と全く異なる風趣であ

る。これを天台の術語で寂而常照といふ。照

のない寂は眞個の寂に非ず。寂のない照は眞個の照にあらず。こゝに到つて始めて芭蕉翁の「さび」を説くべし。枯れ枝の句の作られる爲の指導が、傳教大師の比叡山開創の歌、すなはち、

阿彌多羅三藐三菩提の佛たち

我立杣に冥加あらせたまへ

であつた事を思ふ時、俳諧人の退屈まぎれからは斷じて「さび」の生れない事がわかる。山中に心を澄ます人のみが觀音像の千手千眼の意味を味ひうる。山に入つて氣樂になるのではなく、千本の手があつてもまだ足らぬ忙しい思ひで世を憂ふのである。この憂が涙となるのである。惠心僧都の法師品のうたに、

靜なるところは安くありぬべし

心すまさむかたのなきかな——新千載

と云ふのがある。決して心をすます事は簡單に出来る事ではない。心をすまし得たと思ひあがつてゐる人に眞個の寂寞の境地がわからうはずはない。これが天台家で修行の階位を立つるとして、入門の初歩に五悔の位を置き、懺悔を以て心をすます方法の第一歩とする所以である。

人に恥かしいとか、腹が立つとかで流す涙ではない。山中の寂寞に坐して誰に遠慮なき所に流す涙である。

つく／＼と物を思ふにうちそへて
折あはれなる鐘の音かな——西行

いくら泣いても泣ききれぬものがある。たゞし、その涙を美化する鐘の音があたかも如来の梵音の如く、たのもしく一切を打ちまかせ奉る心持にしてくれる。

たのもしな宵あかつきの鐘の音に

物おもふ罪は消えざらめやは——西行

このたのもしさの恵まれぬ心の澄みは決して本當の「澄」ではない。すなはち、西の山べに近づかぬ心の澄みは本當の「心の澄み」ではあり得ない。

この稿は法師品の「乃至一偈一句」といへる心もて勿々の間にものしたるものなり。乞ふ、ゆるしたまへ。——(をばり)

(五一頁より續く)

物は一切やめて月の輪と殿上人とだけを描いたら或は効果が上つたであらうと途中から氣がつきはじめた。或は能谷や津戸やもつと非智識的な阿波介や、耳四郎のやうな弟子ばかりを主として聖フランシスの「小さき花」のやうな手法で上人を傳へるのも一方法であらうか。何も言はないつもりでゐながらやつぱり語つてしまつた。この二つの方法に氣がついた位が拙作を試みた失敗の賜物であつたかと思ふ。

放菴の談を傳へて眞意を誤つてゐなければいいがと心配しながら筆を擱く。

(おはり)

坐 禪 の 話

山 田 靈 林

坐 禪 と い ふ も の は

静かな心の座

感ぜられる。

激しい混亂と喧騒とはことの外の何ものでもない狂騒樂が、異常な勢を以て都市の空氣を荒だて、静寂そのものゝやうな田園の平和までが蹂躪されさうになつて來た今日、その狂騒樂とは全く對蹠的な關係をなすところの「静かな心の座」を欲求する運動が、社會の各方面に嚮勃として現はれ來りつゝあることは、欣快に堪へぬ。

「朝の修養」のための時間がラヂオにある、その講話に耳を澄ます人が實に驚くべき數に上つてゐるといふ、その人々の爽かな静かな朝のその姿から、光が放つてゐるやうにさへ

ラヂオには限らぬ、宗教的な種々なる集團に於て、朝の爽かな静かな營みが催される傾向が漸次隆んになり、朝の會といふものが各地に催される。夕の會も勿論ある、午の會もある、何處の地に行つて見ても、家々から唱名の聲が聞える、寺々から坐禪の香が薫る、といふ有様である。

それらの宗教的な營みは悉く皆「静かな心の座」の現はれであるといふことができる。それらの營みをする人々が、意識的にどの人もどの人もが、自分自身「静かな心の座」にあることを承知してゐるとはいはれないであらうけれども、實際に於てその人々は皆「静かな心の座」にある人々である。而して

その「静かな心の座」を意識的に求めて、その効果を十二分に收め得るところのものは、即ち「坐禪」である。

坐禪の坐の字は「坐る」といふ動詞である、佛や祖師方のお坐りになつたその坐法に依準して坐ることである。禪の字は梵語の禪那 Dhyana の那を省いたもので、譯して「靜慮」といふ。これには「慮を靜める」といふ意味と「靜かなる慮」といふ意味とある。即ち佛や祖師方のなされた坐法によつて坐ると、先づ吾々の荒々しい心の動亂を靜めるところとができる、妄想邪念を靜めることができる。「慮を靜める」ことができる。さてその慮を靜め得るとどうなるか、寒灰枯木のやうになるのかといふに、さうでない。佛や祖師方の如き落ちつきがあり、光があり、力があるところの「慮」が現はれる、「靜かな慮」が現はれるのである。

かやうに、佛や祖師方の坐法に依準して坐る、粗雑亂動の慮が靜まる、靜かな慮が現はれる、かういふ實際が刹那々に持續されてゆく、それが即ち坐禪といふものである。

佛や祖師方の坐法

坐禪は佛や祖師方の坐法に依準して坐るところから始まるといふ。その坐法とは如何。

佛や祖師方の坐法といへば、人間のそれとは大に飛び離れたものであらうと思ふ人もあるのであるが、實はそれは人間の坐法の本格的なもの、ことである。人間は我儘でふしだらで、本格的の坐法を忘れてぐね／＼した坐り方をしてゐるのであるが、一たび佛や祖師方の坐法を學べば、自分の本當の坐法といふものに立ち歸れたことが感ぜられ、その法によつて誠に安らかに坐り得るのである。

先づ坐蒲團を二つに折つて、それに腰をおろす、脚を前方に揃へて出し足の平を疊につ

けて膝小僧を高くして、兩脚を抱くやうにする。それから左の脚を外方に向けて疊の上に寝かせながら、右の足の甲のところを兩手で以つて靜かに、左の脚の先きの方からすりあげて来て、左脚の股の上へ右足の甲が當るやうにして載せる。それから今度は左足の甲に兩手をかけて、右脚の股の上へ左足の甲が當るやうにして載せる。これで坐法に依準して脚が組めたのである。兩足の平が上へ向いてそれ／＼他方の脚の股の上に載つてゐる。兩脚の膝小僧がそれ／＼疊にくツつき、坐蒲團の上のお尻とで、鼎の三脚といふ關係をなして、全身を支へる。

初めの間は脚がうまく重ならなかつたり、膝小僧が一方だけ疊からうんと離れたり、踝が痛かつたり剃刀骨が折れさうだつたり、とてもこれは駄目だと挫折しさうになるものであるが、一度二度三度と繰り返して二分でも三分でもやつてゐる間に慣れて、いつの間にか三十分も一時間も數時間も、安樂に坐れるやうになる。

手の整へ方

手を整へるには、先づ右手を下腹のところへ持つて行く、そして掌を上に向けて、脚に觸るか觸らぬくらゐのところで、下腹に軽くくツつけて支へる。それからその上向きになつてゐる右の掌の上へ、左の手を持つて来て、掌を上にして重ねる。つまり右の手指四本が上を向いて揃つてゐる上へ、左の指四本を揃へて指の背を下にして重ねるのである。

そして拇指は左右とも爪が上を向くやうにして上方にあげて、その指頭が觸れ合ふやうにする。さうすると拇指二本をつなぐ一つの弧ができる。これを相對して下方から上向きに弧をなしてゐる掌とで、一つの輪形が作り出される。輪形といつてもそれは横長の輪形である。楕圓形である。

かやうに整へられた手を、脚とすれ／＼にして下腹部に軽くあて、その接觸面で支へる

のである。

上體の整へ方

脚と手とが整うた、次は上體の構へである。上體は眞直ぐに突ッたてればよいのであるが、コツを呑み込まないと、いくら骨を折つてもうまくいかぬ。

先づぐんと一度、後方へ反り返るがよい、それから反り返つた上體を今度は逆に、前方へ弓なりに曲げる、猫背になるのである。かなり深く前こゝみになつたとき、體のどこに氣力が満ちてゐるかを探つて見ると、下腹のところに全身の氣力が満ちてゐることが感ぜられる。下腹に満ちてゐるこの氣力をそのまま持ちこたへられるやうに注意しながら、上體を靜かに起して垂直に突つたてゐる。このときどうしても下腹の氣力が胸の方に上つてくる、胸苦しくさへ感ぜられてくる、そこでフーンと一氣息つきながらみぞおちをさげるやうにすると、氣力がスーッと下腹に下つてし

まふ、實にすが／＼しい感じである。

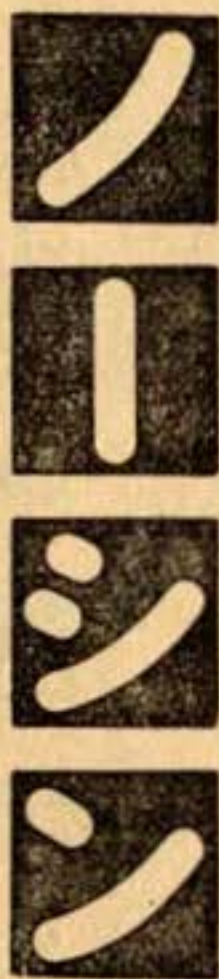
このすが／＼しい感じを味ひしめるかの如くに、この状態を持続する、これができるやうになれば、坐禪ができたといつてよい。坐禪を本格的に修するには、身構へ氣構へ心構へといふ三方面から修練する必要があるが、しかし右述ぶるところの坐法（身構へ）が本當にできれば、おのづから氣構へも心構へもそこに充足されてゐるといひ得る。

○

純正頭腦藥

最も進歩した

頭痛に



頭痛に一服
胃腸に無害

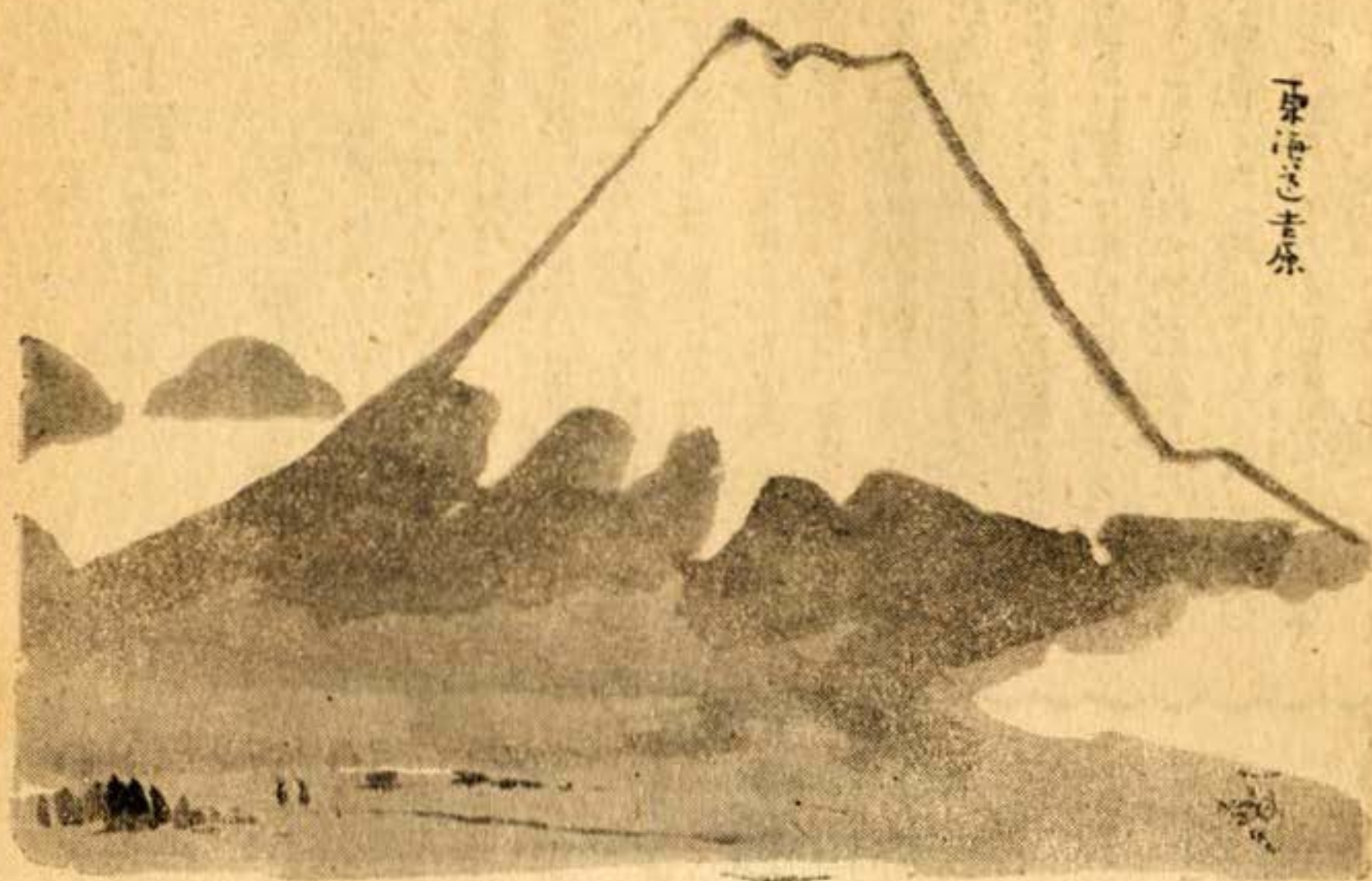
頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と進行がなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執務、裁縫、徹夜映画、観劇後等で心身の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今「ノーシン」をのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から抜け出て来た様に頭はハツキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

町京區東市原古名
社會名合郎太長川荒 元 遺 製

坐禪を修することによつて得られるところの境地「虚」を靜める「過程の相狀や、靜かなる「虚」の實況などについては、再び本誌に執筆の機會を得るときにこれを譲る。

（おはり）

丁原海邊古原



旅路の芭蕉

宇野浩二

小島一谿畫

芭蕉と知里は夜明け前に小田原を立つた。早川の岸に沿うて道が次第に上りになる頃に、やうやく夜が明けかかつて来たが、東の方の海の上の空が赤く焼けてゐるのを見ると、知里は口の中で、「チヨツ！」と舌鼓を打つて、

「朝焼けは糞にもならぬ」と獨言ちてから、芭蕉の方を向いて、

「残念ですが、箱根越えは雨らしいですな。」と云つた。

云はれて、振り向いて見ると、なるほど、赤く焼けた空に煙のやうな形をした横雲が、段段染のやうに棚引いてゐた。また、西の方を見ると、行手の箱根の山々は既に去來する雨雲に閉ざされてゐた。それを見ると、芭蕉は溜息をついた。が、ちよつと立ち止まつた二人は勵まし合ひながら歩き出した。それから半時間も立たないうちに、彼等はまだ霧雨の降

る山坂道を上らなければならなかつた。――

芭蕉は、七八年前の夏、この道を通つたことがあつた。その時は、父の病氣を見舞ふために歸國する旅であつたが、まだ三十二三歳の頃であつたから、心身共に健かであつた。而も天氣まんがよく、江戸を出てから小田原までの間に、二三次。夕立に逢つただけで、殆ど晴天つづきであつた。その代り、日中は暑かつたが、箱根の關所を通つた時、名物の倒さ富士も見た。

ところが、この時の旅は、久し振りで故郷の伊賀へ寄るつもりもあり、事に依つたら、伊勢にも廻り、奈良、吉野などへ行く氣もあつたが、芭蕉が、旅らしい旅を思ひ立つた最初の旅であり、『野ざらし』を覺悟の旅であつた。それに、時も秋、年も四十一歳であつた。四十一歳といへば、普通の人に於ては男盛りの年であるが、先(章序)に述べたごとく、芭蕉は、髪を剃つてゐた上に、髭は灰色になり、額と頬に目に立つ皺が殖え、それに背が低かつたので、六十歳ぐらゐに見えた。さうして、この時の旅の仕度には、檜笠をかぶり、椿の杖を突き、紙衣の衣に十徳を著け、襟に頭陀袋をかけ、手に十八の珠數を携へた。この旅姿から想像しても、この時から五十歳で死ぬ時までの彼の行脚の旅に對する覺悟がわかる。そ

れに道連の知里は、芭蕉より三歳下の三十八歳であつたが、芭蕉が「道(旅の道)の助となりて、萬いたはり、心を盡し侍る、常に莫逆の交深く、我に信ある哉この人」と云つたほど、芭蕉に畏敬されてゐた人であつた。知里といふのは俳號で、大和國葛下郡の物持であつたが、晩年に剃髮して禪に入つた程の人であつたから、この時の芭蕉の道連としては實に『持つて來い』の人であつた。彼は、江戸では淺草に住んでゐて、さまざまの世間の出來事を知つてゐたので、深川の芭蕉庵を訪ねる毎に、芭蕉と門人たち(彼もその一人)との俳句の話が一と通り終つた時分に、その平生の見聞を芭蕉に話して、芭蕉を微笑ませたり苦笑させたりする人であつた。併しかういふ點で、彼等は馬が合ふのであつた。――

山に登るに従つて霧雨が本降りになりなつて來た。尤も、登ると云つても、湯本までは箱根山としては平地のやうなものであるから、歩くのに骨は折れなかつたが、この雨の中を關所のあるところまで行かれるかしら、と彼等は言はず語らず心配した。が、さいはひ、湯本から早川に別れて、須雲川の岸に沿うて歩く頃から、雨は次第に小降りになり、早雲寺の門前を過ぎて、半里行程つたところから、道が葛折になり次第に嶮峻になつて來る時分には、霧雨になつて來たが、そ

の霧雨は晴れさうで晴れなかつたので、今度は道がはかどらないので困つた。さういふ時は、知里の四方山の話は芭蕉を喜ばし慰めた。知里の浮世話は道の長さを忘れさせた。が、畑宿から双子山の麓を通る街道は、街道といふより、文字どほり、「萬丈の山、千仞の谷」であり、「羊腸の小徑」であつたから、知里も浮世話が出来なくなり、芭蕉もそれを聞いてゐる餘裕がなかつた、油断をするといつ遭難するか分らなかつたから。

やがて、關所に著いたが、霧雨は少しも晴れず、山々の眺望はおろか、蘆の湖さへ半分しか見えなかつた。

「あんな難儀な思ひをして此處まで來たのに、實に残念ですな、」と知里が云ふと、
「これも却つて風情がありますよ、」と云つて、芭蕉は次ぎのやうな俳句を詠んだ。

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

二人の旅人は、箱根の山を下り、駿河の國に入つて三島、原、吉原と、旅をつづけた。吉原の宿から一里二十町ほど行くと、富士川の岸に出る。その富士川の岸に沿うて歩いて行くと、ふと道の傍に幼い子の泣き聲が聞える。見ると、二

歳か三歳ぐらゐの子が枯草の中に捨てられてゐる。芭蕉はその捨子の傍に蹲つて、暫くじつとその子を覗くやうに見てゐた。知里が少し離れたところに立つて見てゐると、芭蕉は珠數を持つた左手を宙に持上げ、右手に杖を引きづるやうな恰好にして握つて、半分は獨言のやうに、半分は捨子に話しかけるやうに、

「この富士川の早瀬のやうに、激しい浮世の荒波を渡り切れずに、失業した親が、露のやうな命ではあるが、せめてその露の命の消えるまで、と思つて、ここに捨てたのであらう。おお、小萩の花が秋の風に散らされるやうに、秋の風が小萩の花を散らすやうに、今宵のうちに散るか、明日になつて萎れるか、可哀さうな子ぢや。

おお、幼児よ、まだ口さへきけないお前が、こんな所に捨てられたといふ事は、いかなる事であらうか、いかなる因縁であらうか。

おお、幼児よ、お前は、父に憎まれたのであるか、又、母に嫌はれたのであるか。否、否、父はお前を憎んだのではない、母はお前を嫌つたのではない。總てはまはり合せた運命といふもので、誰を恨むこともない。唯、さういふ運に生れついた自分を、さういふ不運に生れついた事を、あきらめる

より仕方がない。」

云ひ終ると、芭蕉は、袂から食べ残りの菓子か何かを出し、それを捨子の手に持たして、立上つた。さうして、芭蕉は、何事もなかつたやうに、知里と一緒に歩き出した。知里は、芭蕉と並んで歩きながら、どうして今の捨子をほつておいたか、それを聞かうと思ひ又聞きたくて仕方がなかつたが、幾ら親しい間柄でも、事件が事件なので、聞くのは悪いやうな氣がした。又、そんな事を聞いたら笑はれるやうな氣がした。と、芭蕉の方から、「知里さん、こんな句が出来ました」と云つて、次ぎのやうな俳句を詠んだ。

猿を聞く人すて子に秋の風いかに

これを聞くと、知里は、

「ふーむ」と唸るやうに、さうして後は心の中で、云つた。

「猿を聞く人すて子に秋の風いかに……ふーむ。……猿が子をたづね、猿が親を求めて鳴く聲は、その哀れさ、その悲しさ聞く人、自然に涙をもよほすと云ふ、——これは昔の人の言傳であるが、——若しその人が、秋風に吹かれて泣く捨子の聲を聞いたら、さぞ斷腸の思ひをするであらう。……ふーむふーむ。猿を聞く人すて子に秋の風いかに……やつぱり、芭蕉といふ人は、人情の深い人なんだなア」と思つた。



併し、又、知里には、「どうして、この人情ぶかい芭蕉が、『猿を聞く人すて子に秋の風いかに』といふやうな俳句を作る芭蕉が、あの痛氣な幼兒に向つて、『總てはまはり合せた運命といふもので、誰を恨むこともない。唯さういふ運に生れついた自分を、さういふ不運に生れついた事を、あきらめるより仕方がない。』といふやうな冷たい言葉が云へるのであらう。」と考へられた。又、「芭蕉のやうな、やさしい氣持の人に、あんな風に、わざと強いことを云つて、諦めでもしなければ、堪へ難いのであらうか。あの冷いやうに見える言葉の裏に、悲しさの極まつた心があるのであらうか」とも考へられた。又、『船頭は舟の上で一生くらし、馬子は馬の轡を取るうちに齡をとつて行く』自分も、さういふ人たちのやうに『旅』を自分の住處としたい、と考へてゐる、芭蕉のやうな人には、かういふ行脚の旅の途中で、かういふ小さい子供を助けるのは、重い荷物を背負ふやうなものだ、と考へたのであらうか」と知里はいろいろと思ひ惑つた。——

その時、芭蕉が次ぎのやうな話をした、道を歩きながら。

「わしはあの捨子を見た時、路通のことを思ひ出しました、わしが初めて路通に會つた時のことを。……」

知里は、芭蕉とならんで歩きながら、芭蕉の話に聞き入つた。左手に大海が見晴らされた。彼等の歩いてゐる街道のその近くまで波が寄せてゐた。右手には富士山が頂上から左右の裾野まで眺められた。併し知里の心は、その東海一と云はれてゐる景色より、芭蕉の話の方に引かれた。山路は寒いがその邊は南に駿河の海が開けてゐるので春のやうに暖かであつた。

或る年の五月の或る日、芭蕉は琵琶湖に近い街道を歩いてゐた。いつもの通り急がぬ旅路であつた。所は草津の近くであつた。松並木の街道であつた。道ゆく人が殆どなかつたので、晝間であつたが、深閑としてゐた。ふと傍の松の木の間根元に、一人の男が、その根を枕にして、晝寢をしてゐるのが、芭蕉の目にとまつた。その傍にちやうど腰をかけるのに都合のいい石があつたので、芭蕉は、その男の目を覺まさぬやうにと、そつと其の石に腰をかけた。目敏い質と見えて、芭蕉がその石に腰かけた氣色で、ちよつと薄目を明けて芭蕉の方を見たが、直ぐ目をふさいで、眠りつづけた。

その寢顔を見ると、形は粗末であるが、或ひは乞食かとも思へたが、顔には智的なところがあつた、少

し陰氣な感じはあつたが。が、芭蕉は何といふ譯なくこの男に心を引かれた。併し、寢てゐる人間を相手にする譯にいかないし、芭蕉自身も、その日はいつもより早く起き、いつもより歩き過ぎて、疲れてゐたので、今度は湖水の方に向つて腰を落著けて、心ゆくばかり目の前の琵琶湖の景色を眺めた。風のない日で、湖水は鏡のやうに隠かで、湖水の彼方の比叡山はその山の皺まで見えた。遙か彼方の比良山もその高山らしい姿を北の空に刻みつけてゐた。又、近くは唐崎、その左の方に大津の町、大津の町の後の長等山、大津の町より手前には、石山、粟津、矢走などが、指呼のうちに眺められた。芭蕉はさういふ景色を眺めてながら、

比叡の山いつより風の氷りけむ都は今朝ぞ初雪の空
近江路や北より冬は來にけらし比良の大山まづしぐれつ

つ

はるかなる三上の嶽を目にかけていくせ渡りぬ野洲の河

波

明日も來む野洲の玉川萩こえて色ある波に月やどりけり
などといふ古人の歌を思ひ出したり口遊んだりしてゐるうちに、自分も俳句を作らうと思つたが、珍らしく、その日に限つて、どうしても出來ない。で、その前の日の晩、瀬田で作

つた、

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

この螢田毎の月に比べ見ん

などといふ俳句を思ひ出したり口遊んだりしてゐると、後の方でござこそ云ふ音がした。見ると、先きの男が首を持上げ不審さうな顔をして、芭蕉の頭の先から足の先まで、寢惚眼で見上げ見下ろしてゐる。芭蕉の方から微笑みかけて、

「失禮ですが、あんたは、此の邊のお方ですか」と言葉をかける、

「この邊も、あの邊も、ありません。到るところに路あり、到るところに我家あり、といふ譯です」とその男は云つた。

「わしも無住を心とする者ぢや。わしも足の止まるところを我家と思つてゐる。……」

「しかし、私は唯の乞食です。あなたのやうなお坊さんと違ひます。」

「いや、わしは坊さんの風はしてゐるが、ほんととは俳句を作つてゐる者です。」

「それは愉快です。私は歌が好きです。尤も、下手の横好きといふ方ですが、……」

「わしは、歌は作らんが、歌は大好きです。中でも、西行法

師が好きぢや。……西行法師の、『古畑の岨の立木にゐる鳩の友よぶ聲のすどき夕ぐれ、……實にいい歌ぢやと思ふが、……あんたはどんな歌を作つてゐますか？』

見ると、その男は、いつの間にか、仰向きに寝ころんでゐたが、眠つてゐなかつたと見えて、

「……ぢやあ。一つ。……『露と見るうき世を旅のままならば何處も草の枕ならまし』……下手ですが、まあ、謂はば、自

分の氣持を歌つたつもりです。』

「ほお、その氣持はわしの意見と同じぢや。……ところで、あんたは、自分のことを、乞食と云つて居られるが、あんたは根からの乞食ではない、と思ふが？……」

云はれて、その男は次ぎのやうな話をした。——

彼はこの近在の豪家の生れであるが、父の顔も母の顔も殆ど知らない。彼の父は彼が満一歳にならないうちに死に、彼の母は彼の父が死んだ時から三月程後に死んだ。彼には兄が一人あるきりで、その兄は彼の父の先妻の子で彼と年が親子ほど違ふ。さういふ譯で、彼は幼い時に兩親に死に別れたが、祖母がゐたので、十八歳の年の春までは殆ど浮世の苦勞といふものを知らずに暮した。ところが、祖母が死ぬと、それを待ち兼ねてゐたやうに、兄と兄嫁とが彼をいびり始めた。——さういふ風に





彼には思へた。さうして、初
 めのうち、兄の方が男だけ
 に未ださつぱりしてゐると思
 つてゐたところが、仕舞には
 兄の方が深刻な事を彼は發見
 した。それは、次第に分つて
 來たのであるが、彼の生母と
 兄とが非常に仲が悪かつたの
 が元で、彼の兄は、彼を、義
 弟といふ感情より、自分を苛
 めた彼の母の子といふ感情で
 憎んだらしい、といふ事であ
 った。然し、又、彼の學問と
 歌の友達の話では、悪いのは
 彼の兄でなく、兄嫁の方で、
 彼女は、彼さへゐなくなれば
 極貧の暮らしをしてゐる彼女の
 里の弟妹たちを引取りたいと
 いふ魂膽を持つてゐる、とい
 ふ事であつた。又、或る人は

彼の兄は、彼が人以上に學問の出來たことを心よく思はなかつた上に、彼等の父が彼に残した遺産や田畑に目が眩んで彼を追ひ出す氣になつた、と云ふのであつた。——かういふ色色の事が彼に煩さくなり、いつそ何もない事が一番氣樂に違ひない、と思ふやうになつた。——

ざつと、かういふ事を、彼は、ぼつりぼつりと、ときどき面倒臭さうな顔をして中途で止めさうになつたり、ときどき冷たい笑ひ顔をして空嘯いてみたり、ときどき不機嫌な顔になつて随分しばらく口を噤んでゐたりして、話したのであつた。——

「一人になつて、寂しいと思ひませんか。」

「嫌な人間の顔を、……見ずに済むだけでも、清清します。」

「清清したといふ氣持は、よく分りますが、一人になつて不自由と思ひませんか。」

「私は、人に氣兼ねるほど、不自由なことはないと思ひます。私は、一人になつて、自由になつて、初めて、人間に生れた有難さが、分つたやうに思ひました。」

「あんたは、お若いのに、なかなかえらい事を云ふ。……わしは、江戸に、門人から借りてゐるんちやが、乞食小屋のやうな家がある。そんな小屋のやうなものでも、家と名のつく

やうなものがあると、暮しとか、人が訪ねて來るとか、……あんたが云ふやうに、自由なやうで不自由ぢや。……さう考へて來ると、かうして、旅をしてゐる時は、わしのやうな行脚の旅をしてゐる者は、一ばん氣樂で一ばん自由ぢや。……どうぢや、こんな一つ所にゐるより、わしと一緒に、旅に出てみませんか」

「……」相手は直ぐ返事をしないで、やがて半分獨言のやうに、「……家を出てから半年あまりになる……半年あまり、人らしい人と話をしたことがなかつたので、京都にどういふ事が起つてゐるか、……それどころか、近い大津にも行つたことがないので、大津のことさへ、知らぬ。まして江戸の事など、……初めのうちは、街道を通る人たちの、話聲や話が耳にはひりましたから、幾らか世間といふものの様子も分りましたが、今は街道を通る人たちの、話聲は耳に入つても、肝腎の、話がよく耳に入らないから、世間の事は一切知りません、聞えて來ないからです。……旅のお坊さん、こんな氣樂な事はありません。かうして毎日寝ころんで天を見てゐますと、人間より、天の方が……旅のお坊さん、私は、やつぱり此處にゐた方がよいかと思ひます。……」——

併し、この男は、結局、芭蕉と一緒に旅をすることになつ

て、芭蕉と一緒に江戸へ出た。この男が「到る處に路があります、到る處に家があります」と云つた言葉から、芭蕉は、『路通』といふ言葉を造つて、この男の俳號にした。――

「かういふ事があつて、わしは路通を江戸へ連れて行つた譯ですが、」と芭蕉は知里に話しつづけた。「路通が、江戸へ出てから、あんなに暮しに困つたのも、女の事で間違ひを起したのも、その爲めに、あんな……わしの僞筆をするやうになつたのも、皆、わしが悪かつたのです。路通は、琵琶湖の畔で世間の出来事も見聞きしないで、木の根を枕にして寝たり、天を見て暮したり、鳥や獸と遊んだりしてゐたら、あんなに生活の苦勞もせず、あんなに女の苦勞もせず、あんな良くな事をしないで済んだのです。知里さん、あんたも御存じの通り、路通はわしの弟子の中で、一風も二風も變つてゐましたが、去來が褒めてゐる通り、路通の才能には獨得なところがありました。……芭蕉の聲に珍しく情熱がこもつて來た。

「知里さん――」

鳥どもは寢入つてゐるか余呉の湖

くたびれて烏ゆくなり雪ぐもり

かういふ句は、路通でなければ出來ませんよ。人が、私の

行方と、路通の行方と何處か似たところがある、最も好い例は風雅を乞食で行かうとしたところ、その違ひは大と小との違ひだと云ひますが、それは略々當つてゐます。事に依つたら、性格も似てゐるかも知れません。併し、知里さん、「鳥どもは寢入つてゐるか余呉の湖」は、私と雖も及び難いところがある。路通にはさういふ獨得の才能があります。私が路通を江戸へ連れ出したのは私の一期の失敗にしても、路通のやうな才能を自分が拾ひ出した、と考へると、幾らか私の氣が安まります。……が、知里さん、私は……却つて私の方が路通に濟まないと思つてゐます。……私が、捨子を、見捨てながら、路通を思ひ出したのは、知里さん、さういふ事を思ひ出したからです。……」

知里は答へる言葉を知らなかつた。

數日後、尾張の鳴海に著いて、知足といふ門人の家の敷居を跨いだ時は、二人ともこの家で寢ついてしまふのではないかと思つたほど疲勞してゐた。二人は小田原を出てから宿屋らしい宿屋に泊つたことがなかつたからである。この知足といふ門人は、芭蕉がかういふ行脚の旅をしない時分から馴染で、一家三人そろつて芭蕉の門人になつた程、俳諧には由

緒のある家筋であつた。屋敷を千代倉と云つて造酒屋であつた。又、この鳴海の海岸一帯は星崎と云つて昔から「闇に千鳥」が名物であると云はれてゐる。芭蕉は、この鳴海地方の風景と人情が好きで、その頃は此處を終生の地と見立ててゐた程であつた。

星崎の闇を見よとや啼く千鳥
といふ俳句は芭蕉自身も氣に入つてゐたらしい。

ところが、この鳴海の知足の家で泊つた晩、芭蕉は驚くべき事を知足から聞いた。それは彼の數ある門人の中で路通とは違つた意味で、彼が最も親しみを持つてゐた杜國が、三河の伊良古崎の保美といふ處に人目を忍んで住んでゐるといふ事であつた。尤も、名古屋の米穀商であつた杜國が、米の相場場の事で、罪に問はれて名古屋から追放されたといふ事は、芭蕉はかねてから聞いてゐた。この杜國といふ人は、芭蕉が「杜國は俳諧を我(蕉芭)に學んで我よりも聰し、一を聞いて十を悟る、我また神學を杜國に聞いて杜國より鈍し、(中略)『冬の日の』の巻々、一句も杜國が句に斧を入れたる事なし」と書いてゐる程の學者であつた。

この杜國が保美といふやうな邊鄙な處で、一人寂しく暮してゐるかと思ひやると、芭蕉はどんな難儀をしても見舞に行

きたいと思つた。といふのは、尾張の鳴海から三河の保美までは、後戻りになるばかりでなく、二十五里ぐらゐあつたからである。それに、その年の秋は不順な氣候がつづいて、不斷は暖い所であるのに、冬のやうな寒さがつづいたので、知足は心配して、

「お師匠様が保美に行つて居られる間、知里さん、あなたは餘程お疲れになつてゐるやうにお見受けしますから、此處で待つて居られて、お師匠様のお供には、勝手を知つてゐる越人がよいかと思ひます。名古屋までは一と走りでございますから、早速、越人の所まで使を出しませう」と云つた。

知足の手紙を見た越人は、大喜びで、使と一緒に、やつて來た。彼が喜んだのは、芭蕉に會へる喜びばかりでなく、杜國を見舞ふ機會が出來た事であつた。それは次ぎのやうな謂があつたからだ。——越人は、越後の産で、若年の頃國を出て、放浪の旅に上り、尾張の知多に落著いた。同じ芭蕉の弟子で、名古屋に野水といふ俳人が住んでゐた。野水は、醬油醸造を業としてゐた上に、名古屋の町惣代を勤めてゐた。この野水の世話で、越人は、名古屋で染物屋を営んだが、謙遜な性質で、人には學問など少しもしないと云つてゐたが、實は儒學を小出洞齋に學んだので中中の學者であつた。杜國

は、この越人が他國から來てゐることに同情し、幸ひ自分が米穀商で相當の資産があつたので、始終貧乏をしてゐた越人に金品を貸與したが決して催促をしなかつた。——越人が杜國を見舞ふ機會が出来たことを喜んだのは斯ういふ謂があつたからだ。——

翌朝、芭蕉と越人は保美に向つて出發した。その夜は吉田(今)で一泊した。

寒けれど二人寝る夜ぞ頼もしき

吉田で詠んだ此の芭蕉の俳句を見ると、氣を許した師匠と弟子が旅の宿で枕をならべて寝てゐる様子が、師匠の芭蕉が弟子の越人を信頼してゐる氣持が、しみじみ表れてゐる。——が、吉田から伊良古岬の方へ行く五里の道は、可なり困難であつた。越人は芭蕉のために馬を雇つた。道は南に向つてゐたが、非常に寒かつた。殊に、あまつ繩手と云ふ暖は、田の中の細い道で、海の方から吹いて來る風は、眞冬の風のやうに寒かつた。朝のうちなど殊に冷たかつた。芭蕉はその繩手を馴れない馬の轡にしがみつくやうにして乗つてゐた。馬も、竝んで歩く越人も遅々として進んだ。——

やうやく尋ねあてた杜國の隱家は、保美村の中の、福江町畠村にあつた。暴風雨に晒された佗しい小屋のやうな家であ

つた。それに、この邊の家は、何れも風浪を防ぐために、濱底を掛けわたしてあるので、家の中は殆ど眞暗であつた。それが先づ芭蕉の心を痛ました。涙もろい越人はこれがあの、名古屋伊勢町の、通稱を南彦右衛門と云ひ、屋號を飾屋彦兵衛と呼ぶ、あの大きな米穀商の大旦那か、と思ふと、おのづから目頭が熱くなつて來るのを覺えた。又、芭蕉は二年程前に見た時とは見違へるほど瘦せ衰れ、その間に二十年も立つたかと思ふほど深け衰へた杜國の顔を見ると、胸が一ぱいになつて物が云へなかつた。が、芭蕉、杜國、越人と三人が、越人が集めて來た枯葉を燃しながら、昔語りをする間、そこが深川の芭蕉庵にゐるやうな氣になつた。その時、芭蕉は、「麥生えてよき隱家や畠村」と詠むと、

「冬をさかりに椿咲くなり」と越人が脇句を附ける。と、又、芭蕉が改めて、

「梅椿早咲ほめむ保美の里」と詠む。——が、これは勿論實景ではなく、この保美の里、畠村あたりは、冬のさ中でも、畑に麥が青青と延び、椿は云ふ迄もなく梅の花が咲く、——といふ事を詠んで、杜國を慰めたのである。



法然上人像は描き難し

佐藤 春 夫

拙作、掬水譚に關して何か書けといふ御下命ではあるが、自作に就て吹聴がましい事を記すのは好ましくないし、註釋や辯解になるのも同様に面白くない。しかし書けば何れそのうちのどれかになる。いや多分三つを兼ねるやうなことになるであらう。これはやはり何も言はないで置くのがいいといふのもあまり自信がないために相違ない。それ故自分の事はやめて拙作には過ぎもののあの立派な挿畫をして下さつた小杉放菴が法然上人の御肖像が描きにくいと話してゐた事でも記して見よう。

放菴の曰く、上人の御肖像といふものは畫に描きにくいね。今までの繪卷やなどを參考にしたり文章で見たりしても、なかなか上人らしくならない。高僧とか、哲人學者とかいふ型の相貌ではない。悪くすると平凡な田舎の大地主だの政治家などに似たやうな顔になつてしまひさうでむづかしい。頭の形はまづいいとして、目が金色の光を放つてゐたと聞かされてもこれはどうも繪にならな

い……」
と、ほんの一場の笑ひ話であるが、悪くすれば平凡田舎の大地主や政治家などの相貌になつてしまひさうだといふ放菴の言葉には頷けるものがある。といふのは所謂學者や哲人などのやうな特殊な風貌ではなくて平々凡々たる相貌でゐて、その間に一種粗野ならぬ氣魄と權威との光輝が發せら

托鉢僧と但馬守

これは澤庵と云ふ傳説もあるがはつきりは分らぬ。將軍家の劍道指南役、柳生但馬守の處にこつこり托鉢僧があらはれて、大刀の音をきゝながら

「さてさて、これで御指南役なぞとは可笑しな話だ。」

と嘲つた。之を門番が聞咎めて、但馬守に申し入れると、但馬守はその托鉢僧を道場に引入れて、
「貴公は劍術の業を心得てゐられるやうだが、流儀は何か？」
と問ふた。僧は

「流儀はあるが、劍術の流儀ではない。しかし將軍家の指南役と云はれる貴方ほど下手ではない。」

と笑つて答へた。但馬守もいさゝか腹を立てゝ、立合つて見よう

れてゐたので、目に金色の光があるといふのも頭の異相といふのも要はこの曰く言い難い精神力の表現に外ならぬもので、これはやがて先方の精神からこちらの精神に通じて来る電波の一種のやうなものではなかつたらうか。さうしてこれが無かつたなら、或は放菴の申す如く、上人は一見田舎の大地主のやうなゆつたりとした長閑なところや政治家などに見かける太つ腹な動じないといふ泰然たる一面などが確かに感ぜられるからである。それ等のものが圓滿に抜きさしならないやうに溶け合つて氣品と靈光とを發散してゐたらうといふ風に自分にも感ぜられるのである。それをほんの外面的な繪畫に寫すのはいかにも至難であらうと察せられる。そこへ行くと文學といふものは不確かなだけにこんな場合にも目は黄金の光を放つなどと記して讀者の想像に任せて置くといふ便宜が多いところに多少繪よりはやさしいところはあるが、しかし性格として上人のやうなのが最も描きにくいといふ點では正しく放菴と同歎を發せざるを得ない。自分は殆んど上人に就ては何も描かなかつた。その周圍を少しづつ描いて中央にあるものを暗示するより方法がないと思つた。卑怯の誹はあらうがこれが唯一の方法と思へたからである。舊く傳へられてゐる頭光踏蓮の事なども皆この描きにくい曰く言い難い靈的な發散物を傳へようとする手段であつたと思へる。あの顔の神秘的な傳へを十分に生かして上人傳を描く事が出来たら定めし面白からうに自分は力の及ばぬのを痛感した。十六門記にはこの靈光が幾分かあると思ふ。それを、自分が書き直してゐるうちに失はれてしまつた。放菴は古來の繪卷にも、推服すべきものはなかつた。ただ大和繪同好會複製の何とか（はつきり覺えない今度十分に聞いて置かう）はまだしも幾分よかつたがといふ話であつた。十六門記が上人の靈的な發散物を傳へてゐるといふのも筆者が上人に親炙してその發散物に打たれた事があるおかげであらうかと思ふ。

掬水譚は原稿紙にして二百五十枚位なものだけれど自分の不敏のために、設計を誤つて間口を展げすぎてあの枚數に納まり切れなくなつてしまつた。あれだけに納めるには他の人（三四頁下段へ）

と稽古場に出ると、但馬守は木劍を持つて立向つたが、僧は何も持たないで、

「何處からなりと、打つて見られよ！」

と言つて眞ん中に突立つてゐる。

柳生は不埒な奴と打込もうとするが例の僧は、つねと變らず、ここにこしてゐる。打てば打てるが無手の者を打つのは、心が臆くするので、どうしても打つことが出来なかつた。そこで但馬守は木劍を投げ捨て、

「誠に御僧は智識道德の人だ。心法の修業をこそ傳へたまへ。」

と僧の手を取つて厚くもてなしたと云ふ。

一休にも之に似た話があつて、いざ立合ひと云ふ時になると、目をつむつて居眠りをするので打てなかつたと云ふ。

三木 夜話



珍らしい新婚旅行

増上寺法主 大島 徹 水

女子教育の眼目となるものは何であらうか。かう問はれるたびに、私はいつも「賢母を作ることである」と答へてゐる。これは昔から云はれて來た事柄である。しかし嘘のないほんたうのことは、いつになつても新鮮な生々した匂ひをふくんでゐる。もしこの世の中から「母」といふ言葉が消えてしまつたとすれば、どういふことになるのであらうか。太陽の輝かぬ曠野、オアシスの見當らぬ沙漠の世とでも形容するほ

かはない。「母なる大地」といふ言葉があるくらゐである。「母」がないとしたならば、世の中はまさに永劫の闇夜である。また古今の偉人の例を考へてみても、いかに母親の感化が重大な役割を演じてゐるかが分るであらう。頼山陽の母、乃木將軍の母、數へて來れば限りがない。「母」こそは人の世の寶である。

しかし永年女子教育に携はつて來てゐる私が、つねに「賢

母を作る」ことを説きながらも心苦しさを感ぜずにゐられな
 いのは、いまの學校教育といふものが、たゞ「ものを知らせ
 る」ことだけであつて、「そだてる」こと、云ひかへれば「實
 行させること」に無關心な點なのである。生徒は學校で學問
 をならへばいい、それだけであつて自分と云ふものを學校で
 そだててもらはうなどとは考へてもみない。自分をそだてる
 のは兩親きりだと思ひこんでゐる。だから修身の時間も學校
 にゐるときだけの役目しか果さない。「知る」ばかりではすぐ
 忘れてしまふ。ちやうどカードに一枚々々英語の單語を記し
 て暗んじてゐるのを、學校を卒業して三ヶ月放つて置いたら
 すつかり元へ戻してしまつたと云ふやうなもので、單に「知
 る」學問は世の中にもちこんで行けない。「賢母になる」とは
 「賢母としてそだつ」すなはち「賢母として實行する」人間に
 なることである。そだててもらつた學問だけが世の中に出る
 のである。

若い人々はよく「現代式」といふ言葉を使ふ。しかしそれ
 は私に云はせれば「無批判的」だとしかうけとれない。學校
 でならつたことはみな「知る」だけの學問だつたから實際には
 役立たない。だから世間人になれば自分といふものを認識す
 る能力を欠いで、皮相な觀察の眼だけしか持たないのであ

る。「個性をハッキリさせる」などと云ふが、個性があるど
 ころのさわぎではない。新聞の三面記事に胸を躍らせるばか
 りが能ではない。それではまるで操り人形のやうなものだ。
 若い人々の多くは、かやうに自己といふものを殆ど有つてゐ
 ない。自分がほんたうにそだてられてゐないからである。實
 行するやうに教育されてゐないからである。

現代の風習の一つとは云ひきれないかも知れないが、若い
 者同士が結婚式を挙げると、新婚旅行といふものをする。一
 泊か二泊温泉にでも出かけ、贅澤暮しを送つて來ることが流
 行してゐる。私はあれが大厭ひである。家庭生活に入るた
 めの新婚の精神的準備に必要だとかいろいろ理窟もつけられ
 てゐるやうであるが、私は新夫婦を墮落させる第一歩こそは
 新婚旅行である、と斷言したい。これからしつかり踏みしめ
 て歩まねばならない若者達の門出を、何らの益もない遊惰の
 世界に見送らうとするやうなものである。

新婚旅行そのものが悪いのではない。現在一般社會に行は
 れてゐる遊びだけの新婚旅行がいけないのである。ところが
 つい最近、私は實に變つた新婚旅行の話をきいた。もしも次
 のやうな新婚旅行が、少しでも世の人々に眞似てもらへると

したならば、私の新婚旅行に對する考は今までと違つた明るさをもつやうになるであらう。

京都の某寺院へ電気工事に來た男があつた。その工事の仕振りの丁寧なこと、その後始末の掃除の行届いた點などから、炯眼な住職はこの男は普通の職工でないと看破して、「君は何か信仰をもつてゐるか？」と訊ねられた。するとその男は居坐ひを正しながらしんみりとした調子で語りはじめた。

「私は別にこれといふ信仰をもつてゐる者ではありません。

……實は商船學校を卒業して海上生活をして居りましたところ、母がそのやうな仕事は止めてくれと申しましたので、船乗りを止め、元來電氣に興味を持つてゐましたので、電氣工事で生計の道を立てることにいたしました。その後嵯峨へ養子に來たのでしたが、私には考へるところがありましたので、結婚式が済むと養家の兩親に向ひ、『新婚旅行として、四國八十八ヶ所の巡禮をさせてもらひたい。』と頼みました。しかし兩親は勿論のこと、親戚一同誰ひとりとして私の申出に耳を傾ける者がありません。私は、『それでは折角結婚式も済んだのですが、これを許して貰へないのならこの家で生涯住むことは出來さうにも思はれぬゆる離縁して戴きたい。』とかう強硬に申し直したので、たうたう兩親も親戚も折れて私の言

を承諾してくれました。それから私は新妻に向つて、『いよいよ四國八十八ヶ所巡禮の許しを得たが、お前は當世風に汽車や自動車などに乗つて巡禮するのがよいか、または昔風に徒歩で安宿にとまつて巡禮するのがよいか？』と訊いたところ、妻は『出來ることなら昔風の徒歩のお遍路を。』と答へましたので、大いに喜んでこれを實行いたしました。私はこの新婚旅行によつてたいへん自己の修養上得るところがありました。それからこの四國巡禮の體驗から思ひつきまして、私は八十八人の會員を募つて巡禮會といふものを起しました。そして會員は毎日約一時間位の時間を費して外出し、途上落ちてゐる廢物を拾ひ溜め、月に一回それらを持寄りまして夫々賣却いたし、その金子を積立貯金にしたのですが年額六拾圓餘を得ました。この金子で會員一名が一年に一度四國八十八ヶ所巡拜することにしてゐます。或時、私が散歩に出て廢物を拾うて居りますと、某大學生が通りかゝつて嘲笑しましたので、『君等は親の脛を嚙ちつて贅澤をしながら勉強してゐるのに、かういふ我等の有益な努力を罵倒するとは不届だ。』と議論してゐますと、折節そこに通り合せた大學教授の某法學博士が、學生のいふことにも理由はあつたが、君の企てはなかなか有意義のものであると云はれ、以後月一回の會合日に

はその博士もよく參觀に見えるやうになりました。かういふ
 工合に私のやり方は世の教養ある方々の眼から見れば、随分
 間違つてゐることだらけかも知れませんが、しかし私は私
 に出来るだけの範囲で一生懸命にしてゐるのです。私が結婚
 といふ生涯の門出に當つて考へましたこと、これからがほん
 たうの修養の旅だ、と深く心にきめましたことを自己流に實
 行してゐるだけなのです。」

——この話をきいた佳職は大へん感銘して、私に傳へてく
 れたのであるが、まことに我意を得た新婚旅行であると思つ
 て、私も大いに感動したのであつた。この中の新郎の心がけ
 またその新郎に易々として従つて新婚旅行を修養旅行になし

た新婚のこと、これこそ若い人々の世に高らかに呼びかけら
 れる最初の輝かしい叫びではないであらうか。

學問を學んで知ることだけではかうは出来ない。自分が飽
 くまでそだつて行かうといふ心構へがなくては實行されな
 い。若いときの最初の第一歩を遊んでしまふから、老年にな
 つてもみじめなままで暮さなければならぬ。こゝのところ
 をよくのみこんで戴きたいと思ふ。

學校教育も家庭の修養も同義語である。ものを知りさへす
 ればいいのだつたら遊び教育になつてしまふ。私は女子が學
 校で教育をうけるのはどこまでも、「賢母としてそだち」行く
 ことでなければならぬと思ふ。

一枚起請文

寂慧上人の御作

先師良忠にうけたまはり候ひしは、相
 承の安心はまことある心にて、疑なく
 往生せんとおもふを申なり。是もなほわ
 づらはしくば、只助給へと思ふが、往生

の安心にて候。此のたすけ給へのこゝ
 ろのうちに、三心も四修も、皆こもり
 て、往生するぞと候ひしなり。こゝろざ
 しの浅深は、人に随つて有べきなり。い
 かやうにも、をのれ／＼が分を極て、往
 生すべきなり。我よりも心ざしも浅く、
 行業もよはからんを見て高慢すべから

ず。只今／＼のこゝろざしをはげまし、
 念佛を行ぜば十即十生の往益さらにうた
 がふべからず。此の外に別の仔細なく
 候。是もし虚言に候はゞ、釋迦彌陀の
 御罰を蒙るべく候、仍誓言如件
 つたへおくをしへのまゝにたがはずば
 ひとつはちすのつゆもむすばん

信 仰 相 談

三世の縁

(問) 1 夫婦にて三世の縁とは如何なる事で御座いますか。

2 故人の冥福を祈りたく、それには何が宜敷う御座いますか

(東京 歌二)

(答) 昔はよく「主従は一世、親子は二世、夫婦は三世」と云ふことを申しましたが、何から出て来た言葉かよく知りません。佛教では總て因縁即ち幾多の條件が備はつて何事でも現象するものと見て居りますから何んな事でも偶然に起るものではないと云つて居ます。ですから夫婦丈が三世ではない筈です。過去未來現在因果經と云ふ御經には、釋尊が過去の世に於て道を求める時、同じく道を求める一少女に遇つて、燃燈佛と云ふ聖者の仲立ちで夫婦になり生々世々かはる事なく道を求める爲に夫婦は夫を助け、夫は婦を誘ふで精進努力し、終に印度にゴータマ及びヤ

シユタラと生れ合せ夫婦になり、出家成道して釋迦牟尼佛となつたと云ふ前生譚を書いてあります。是で見ますと三世ばかりでなく、生き更り死に更り夫婦の因縁があつたやうです。然し佛教では、幾世かの過去を一つの過去とし、永劫につゞく未來をも一つの未來世と見て、現在と合せて三世と云つて居ますので、長い過去から長い未來迄ズットと、其人達が佛としての完全人格を備へる迄は幾千代かけて變らず夫婦の因縁を結ぶとも云へませう。

次に故人の冥福を祈るには、あなた御自身が信仰に入ると云ふことが、一番効果が多いのです。御經を御讀みになるさうですが、御經を讀むのも信仰に這入る爲めの手段でありまして、云はゞ藥を飲むのに先づ功能書きを讀んでその藥が何にきくかを知るのと均しいものです。功能書丈を讀んで藥をのまなければ駄目であるやうに、少し極端に申し上げますと、御經を讀む丈で信仰に入らなければ効果としては先づ無いに均しいとも云へます。御經を御讀みになるのも結構です。冥福を御祈りになるのも結構です。然しあなた御自身

が本當に人間の本來に目ざめ、生命の問題を御解決になるのは一層結構なことです。其御自身の得られた功德を以て初めて本當に故人の御良人への冥福を祈り得る本當の資格を得られた事にもなりますから。

極樂淨土は何處に

(問) 淨土宗では、極樂淨土を地理的な存在として、そこに吾人が阿彌陀様の御攝取にて參ることが出來、今生にて想像するやうに淨土の生活が出來ると信ずるのでせうか。淨土がそんなに明瞭に解つてゐるものなら、なぜもつともつと現世を立派にするやうに、この地球に近付いて來ないのでせうか。私共の觀念によつて存在する淨土でないのなら、何故私共に、この肉眼乃至感覺によつて認められるやうにならないのでせうか。私共の觀念で存在するものでないと致しますと、信仰で信ずるからあるの、信じないからないのとは言はれないと思ひます。

(埼玉 中野生)

(答) 此世の中では定量的なものを「物質」と云ひ、非定量的なものを「心」と云つて居ます。随つて感覺に依て知り得られるものの

信 仰 相 談

みが存在ではなく、感覺圈外のものも有り得る譯です。然るに私共は餘りに科學第一に教育されましたので、非定量的なものは實在的でないやうに思ひ込む癖があるので、淨土の存在を地理的存在でなくては恰も空なものやうに思ひたがつて居ます。私なども初めは何うしても信ずることが出来ませんでした。淨土の實在を合理的に説明して貰ひ、それが納得出来たら信じてもよいと云ふ氣持が働いて居たのでした。然しそれは科學萬能と云ふ先入觀念が横着な精神を作り上げて、定量的な淨土を目の前に出したら信じてやらうと思はせチツトモ自ら進んで研究し發見しようとして居なかつたのです。御承知のやうに定量的な物質にしても震動の結果として我々の感覺に觸れるものと云はれて震動の極微弱のものは耳にも聞えないが、少し高度になると音として聞え初めズツと高度になると今度は耳には聞えなくなり眼

に見える光りとなり、更に高度になると物質的なものとなると云ふことです。私達の感覺と云ふものがモウ既に極限られた狭い範圍のもので、純粹な科學から見ると随分怪しげなものと云はなければなりません。例へば地球がかなりな速度で走つて居るのに感覺的には決して感じられて居ないやうなものです。電氣にしたつて色々なものに傳導されて居ながら、プラスかマイナスか一方的な時には感じがありませんのも其一例でせう。かくの如く感覺に觸れるとか、觸れないとか、或は地理的にあるとか、ないとか、そんなことは非定量的な問題を云ふ場合にはマルキリ御門ひのことを引合に出して居る譯で間違ひの元になります。

信とは認許の義とも云つて自分に知ることですから、知つた後に信ずるのでなく、知と信とは同時です。若し信が知の後のものなら理論の分る限り誰でも信仰に入り得る筈で、求道の苦心と云ふことは有り得ません。信仰には「何故」と云ふことはありません。理窟でなく、言葉では云ひ現はせない感情でシミジミと知るので。理智で知るのでなく理智

は其際一時影を隠して仕舞ひます。感情が高ぶつて、涙もろくもなります。念佛して居ますと自然に如來様の御慈悲が分つて來る其處に信があるので、淨土が感ぜられるのです。また御尋ねの現世を立派にしたい希望も、菩提を求むる人は必ず起す願ですから、信仰の人である限り努力も致します。それが傳導とか教化とか云ふ行爲ともなるのですが、物質的にヨクなると云ふやうな功利主義的なものなら飛んでもない考へ違ひで、經濟主義的なものは跡から跡から矛盾が出來、缺陷が出來て完全にはなり得ないことです。信仰とか宗教とかはさうした事をねらつては居ません。それよりもつと根本の人間の我利的な氣持をあらためしめ、無我的經濟思想の上に目醒めしめるものです。尙ほ、委しくは到底此欄では云ひつくされません。

(中村辨康)

和歌・俳句 ◆原稿募集◆

本誌は讀者のために、和歌・俳句の欄を正月號より設けます。

選者は、松根東洋城・與謝野晶子氏に目下交渉中。どし／＼御應募下さい。



世目三郎

杓子しらくしを拵こしらへた

僧そう 誓せい 眞しん

湊 邦 三

吉 田 貫 三 郎 晝

(二) 青褪あをめた女をんな

寛政二年の頃、安藝國廣島の城下西大工町に住む、村上甚介といふ米商人がゐた。

糠に塗れて立ち働いてゐる甚介の、何處やら優れた氣品の備はつてゐることに、町内の人々は氣がつかぬではなかつたが、彼が、伊豫務司城主村上頼冬三十三代の後裔であることにまで思ひ及ばなかつた。甚介には四人の子供があつた

父の米商を専ら助けて働いてゐたのは、二男の政治郎であつた。朝早くから米を搗く、得意先を廻る、店にあつて商賣をやるなど、骨身惜まず立ち働いて呉れる政治郎を、甚介は他の子供の誰よりも、信頼してゐた。行末は家業を政治郎に繼がして、自分の老後を托したいくらいに考へてゐた。

政治郎は、親に親切であつたばかりでなく、近隣の人や顧客に對しても、思ひやりが深かつた。政治郎あつての店の評判は良く、遠い町々にまで知られてゐたが、思ひやりのためには、直ぐに利慾を忘れて盡す性質だつたので、店が繁昌する割合ひに、家産は寧ろ乏しいくらいの生活であつた。

或る冬の晩のことだつた。

政治郎が店を片づけ、戸を下しかけてゐると、顔色の良くない、貧しい服裝の女が入つてきた。

『お米を頂きたいのですが……』

眩しいものを見るように、蚊細い聲でいつた。政治郎は耕をとつて立ち上つた。すると、女は政治郎の方へ擦り寄つて来て、袖の下に隠してゐた、風呂敷包を差出した。

『申し兼ねますが、お錢がございません。これでお米を頂けませんでせうか。』

と、口籠りながらいつた。政治郎が不審に思つて、包を開けると五つか六つの子供の着物が現れた。

『お恥かしうございますが、この着物で少々ばかり……』

女はさういつて、顔を伏せた。政治郎は着物に手を觸れて愕いた。仄かながら軀の温りが未だ残つてゐた。政治郎はぎくり胸を打たれて、急いで包みを押しやつた。

『お米は上げますから、早く歸つて、お子さんに着物を着せて上げ

て下さい。』

米を得るために、着物を縛がれた子供の可憐さが、見えるようだつた。それを敢てする親心の悲痛さが、政治郎の心を掻き撈るようだつた。

『お困りならば、お米ぐらいは私が何時でも用立てゝあげます。どうか、こんな惨いことをなさらないように……』

政治郎は泣きたいような氣持で、そういつた。そして米の包へ添へて、若干かの金を紙に包んで渡して、女を歸した。

米を商ふ政治郎の眼には、痛ましい世の姿がいろ／＼に映つた。(なんとこの世に貧乏人の多いことか。食ふや食はずの味氣なさで生きてゐる人が、こうも溢れてゐることか。)

着物を持ち込んで米に代へようとするもの、二合か三合の端米を借りていつて、口を糊しようとするもの、食うだけのことに喘ぐ青褪めた顔が、糸を引いて巷を綴るようにすら考へられるのだつた。

(さうした人たちが惠まれて、青褪めた顔を見ぬようになれば、世の中はどんなに春めいた、生々したものになるか知れない。)

商賈に忠實だつたが、貧乏人の哀訴には全く無抵抗にされる政治郎であつた。これ等の人々の爲に、何かしなければならぬ責任があるようにさへ、思はれて来るのだつた。

(世間には、人の數より仕事が少ないからだ。仕事を作つて興へることが世の中を明るくする途に違ひない。)

政治郎の腹の底に、さういふ考へが日毎に溜つて行くのであつた。

(二) 嫁ばなし

甚介は、年頃になつた政治郎に、早く嫁を持たせたいと思つた。

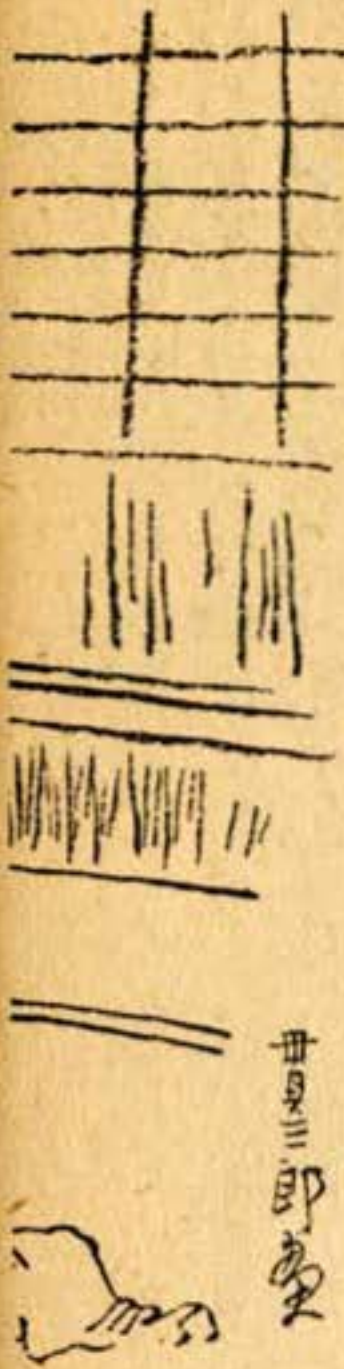
親に優しい、働きの政治郎であるが、若者にあり勝ちな、道樂の途に外れる心配が無いでもない……といふ親心から、秘かに良縁を探してゐたのであつた。

ほど經ての或る日、政治郎を奥の間へ招いて、甚介は、眞顔になつて嫁話を切り出した。

「帯に短し襷に長し、良い嫁といふものはなか／＼探し難いものだ、この話は屹度お前にも喜んで貰へよう。」

甚介は目を細うして、政治郎の顔を覗き込んだ。

「三原の船問屋の三女だ。年はお前より三つ下、氣質の良い娘で、第一家系が優れてゐる。お前が納得するなら、直ぐに祝言の仕度にかゝつてもよい。」



廿三郎あま

半分以上は獨り極めしてゐる甚介は、莞爾と笑つて、政治郎の同意を求めるのであつたが、意外にも、政治郎は唇を噛んで顔を固くした。

「父上、嫁の話なら暫くお断りしたうございます。」

政治郎は苦しげにさういつた。餘りの意外さに、甚介は眼を睜つて聲を呑んだ。柔順な政治郎が父の言葉に逆いたことは、今までになかつた。

「何故氣に入らぬか、何うして断ろうといふのだ。」

甚介は急きこんで理由を聞かうとした。

「この父が吟味した良縁、これ程のものが亦とあらうと思へない。何處が氣に入らぬか、いつてくれ。」

父に覗き込まれた政治郎の顔に、堪え難い苦惱の色が現れた。

政治郎は凝乎と考へてゐたが、何事か決心したように、顔を上げた。

「實は私には、末を言ひ交した女があるのです。」

甚介は、政治郎の言葉を疑つた。眉を寄せて凝視した。

「お隠ししてゐたやうで申譯ありませんが、申し上げる機會がなかつたのです。この縁談が氣に入らぬといふのでなく、私の心は、他の女を必要としないのです。」

政治郎は眞剣になつて言ひ切つた。甚介は腕を組んで苦りさつてゐた。



「お父上、お願いです、此の縁談を断つて下さい。一生一度の政治郎の我儘、約束した女と添へるように、お許しねがひます。」
犯した罪を詫びるように、政治郎は頭を垂れて涙ぐんだ。

(三) 呪はしい家柄

政治郎の心を捉へたといふのは、鷹匠町に住む籠屋の娘お芳だつた。

父の新蔵は籠編みを業とする日稼人だつた。政治郎は商人でありながら細工ごとが好きだつた。使ひ歩きの手元には、新蔵の家へ寄つて、美事に出来あがる籠を見てゐるのが楽しかつた。他人以上に新蔵とは心易かつたし、何日とはなくお芳とも馴れ合つてゐた。

新蔵は、寄る年波に體が衰へ、日稼ぎの腕も鈍る一方だつた。家計の苦しさが、米を買ふ加減に現はれて來たのを、政治郎は黙つて見てゐられなかつた。

政治郎は父や家のものに秘して、米を持ちこんだり、金を買いだりした。沈み勝ちの一家を激勵してやつた。新蔵一家の感謝は涙をもつて政治郎へ向けられたが、お芳は既に年頃であつた。感謝以上の親しさを呼び覺まされて、政治郎にとつて離れ難い女となつてしまつた。政治郎は始めて父の前に打ち明けるのであつた。

甚介は、其の夜他の兄弟を呼んで、政治郎の身の上を相談し合つ

た。

行末を樂しんで、胸に秘めてゐた政治郎の戀を、父や兄がどう斷ずるか、政治郎は不安に脅えつゝ、店先の闇の中に立つて待つてゐた。

父の聲がしたので、政治郎は居間へ通つて行つた。

『政治郎、お前は村上家の先祖が誰であるか忘れてゐまいな。』

父の聲は鋭かつた。並居る兄弟が一齊に政治郎の顔を見た。

『俺の子に至つて祖先の血を汚すことは、忍びぬのだ。お前の慕ふ娘は可哀そうであるけれど、武門の流れを汲む村上家の嫁としては如何にも不足だ、思ひきつて諦めてくれ。』

兄弟も口を揃へてそれをいつた。誰一人味方となつて、政治郎の心を汲むものが無い。政治郎は返す言葉もなく、悄然、部屋を出るのであつた。

働きの者の政治郎が、骨を抜かれた人間のように、腕組んで考へこむ日が多くなつた。

『家柄とはこうも呪しいものか、正しい心を、家柄の前に、矯めねばならぬ必要があるだろうか。』

といつて孝行者の政治郎には父に反いて家柄に反逆することも躊躇された。女は諦められもしようが、心に喰ひ入つた生々しい絆の痕は、どうして拭ふ術があらうか。

政治郎は激しい懊惱から、現世の厭しさを泌々思ふ男になつてし

まつた。

(四) 樵夫の家

それから間もなく政治郎は、親兄弟に無斷で、漂然家を出た。

廣島を西に去る海上五里の嚴島へ渡つて、北之町の吉田甚八といふ親族の家へ身を寄せた。

彼は景勝の靈地に身を置いて、總てを忘れようとした。千年の神秘を湛へる山を仰いだり、海鳴りの音に耳を澄す寒境の變化は、傷ついた政治郎を慰める何よりのものであつた。凡ゆる世上の煩雜を脱け出して、無の心に歸ろうと政治郎は努力した。

間もなく、政治郎は天狗山の麓にある、光明院十六世の住職了單和尚に乞ふて得度し、剃髮して、名を誓眞と改めた。年二十五歳であつた。

佛典を繙き、勤行に日を忘れる誓眞の心に、衆生を濟度する僧侶の任の、如何に重いか悟られて行つた。小我の煩悩に喘ぐ人間の淺間しさを、法の光りへ導びいて、衆生濟度の實を擧げてこそ、凡ゆる人類に幸福が訪れるに違ひないと考へられた。

寺から里へ、墨染の衣を纏ふ誓眞が、佛の道を説いて歩く熱はもとの裏かつた。彼の教へに集ふ島民は、日を逐ふて、數を増して行つた。

或る日、誓眞は山際の樵夫の家保吉の所へ法事に出かけて行つた。

樵夫の生活は、島人の中で一番貧しいものであつた。山から切り出した薪を町家へ賣つて生きるには、嚴島の町は餘りに狭かつた。けれども他に仕事がなく、止むなく樵夫となつて細々と生きる者が少くはなかつた。

保吉もその一人であつた。中風の兄彌七を抱えて、貧しさは人一倍であつたが、彌七が死んで今日は四十九日、些やかな佛事が擧げられてゐた。

佛前の讀經をすました誓眞は、居並ぶ人々に法話をあれこれと話した。

人の世の富貴は泡沫の如きものである。永遠の伴は、法の道に就く人へのみある、など、満座の耳を傾けさせてゐた。

すると其の時、茶の間の方から粗野な荒つぽい聲がした。

『誓眞さん、念佛唱へて金儲けになる法は無えかなア。』

同じ樵夫仲間の金藏といふ男が、勝手の方を手傳ひながら口を入れたのである。座の中にクスリ笑ふ者があつた。失禮をたしなめる聲もした。

『俺ア念佛も言ひたいが、金も欲しいなア。佛になつた彌七だつて、素つぽ薬も飲めねえで、死んだんだ。念佛唱へれや佛になつて、伴か知らねえが、金があれば薬も飲めて、矢張り生きてゐたかつ

た彌七に違えねえんだ。』

失禮な半疊のように聞えた金藏の聲が、涙交りに顫えてくるのだつた。

『おい、金さん、止さねえか。そんなことを誓眞さんへ言つたつて失禮ばかりぢやねえか。止してくれ。』

保藏が金藏の聲を制した。座は妙に白けて固くなつた。

誓眞は黙つてゐた。何かで頭を叩かれたような氣がした。笑ふに笑へず、怒りもならぬ氣持だつた。

(唱名の法悦、念佛の力が、一碗の飯の現實力に及ばぬと見る人の心にも、確かに眞がある。)

と考へざるを得なかつた。

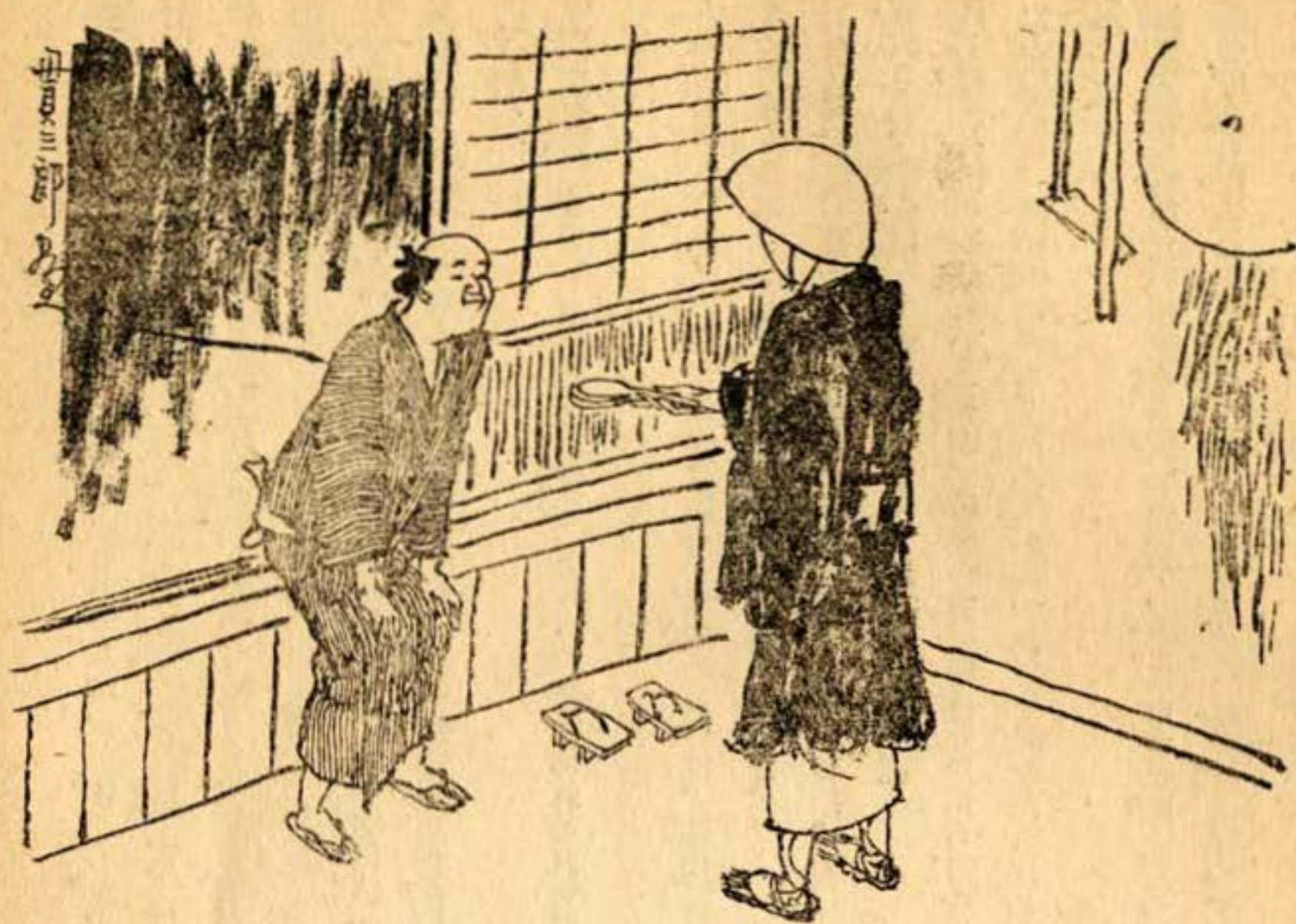
嘗ての米屋時代に見た貧民の群や、島へ來て、貧しい無職の徒を見るにつけて、誓眞は餘りにも世の中を忘れ過ぎてゐた自分に氣がついた。佛前の念佛三昧だけが、僧侶の本分でないようにも思へるのだつた。

『佛をもつて巷を肥やせ。』

誓眞が辿りついた信念は、纏てこれであつた。

(五) 飯 杓 子

庫裡の裏の廣場で、コツ／＼と手斧を打つ音、物を削る音がする



のに、院主の了單和尚が氣がついた。

戸を開けて廊下を裏へ出て見ると、衣の袖を絞った眞誓が、木屑の中で、頻りに何かを作つてゐたのだつた。

「眞誓！ 何をしてゐるのぢや。」

師の聲に振り向いた眞誓は、耻しそくに顔を赤めた。

「杓子を作つてをるのでございます。」

と、傍らの木片をとつて示した。

「杓子なんぞは買へばいいではないか。」

「否え、店に並べて賣る杓子でございます。」

「ハハ……馬鹿な、何をまた思ひ出してそんなことを——」

了單は笑つたが、眞誓は眞面目であつた。

「杓子は日本國中、何處の家でも、一本づゝ入用でございます。角張つた今の杓子では、持つにも握ふにも、餘り心地よいものではありません。もつと使ひ良い杓子を作れば必ず旅の人の目につきま。す。神木で作つた宮島の杓子といへば、誰でも欲しくなるに相違ありません。樵夫するより、杓子を拵へて賣る方が儲かるとなれば、助かる人が島に少くないと存じます。」

眞誓の説明を聞いても、了單の笑ひは止まなかつた。

「ハハ、、、杓子を丸くするといふのか、坊主頭に似せて杓子も丸い、そつういふて人が笑ふぞ。」

その翌日、了單の前へ、作り上げた杓子を五六本並べて、眞誓は

得意だつた。

『如何です、この出来工合は——』

『何だ、とう／＼作り上げたか。』

了單が取り上げて珍らしそうに見た。丸々と艶々しい飯杓子の出来榮え、頭から柄にかけて、誓眞の工夫が見事に加つてゐた。

『成程、お前は器用だな。』

『使つて御覧になれば、便利がお判りになります。』

了單は早速寮所に用ひて、誓眞の技術に頷くのであつた。誓眞の顔は希望に輝いた。

師の褒め言葉に勇みついた誓眞は、杓子を持つて保藏の家を訪れた。

『何んです？ 杓子ですか。これを何うするんですか。誓眞さん。』

保藏が眼を丸くして、杓子と誓眞を見較べるのだつた。

『それを作つて見なさい。山へ行く暇々に、出来る限り念を入れて出来るだけ澤山作つて見なさい。』

保藏が揶揄はれたと思つて笑ひかけるのを、誓眞は制して力強く

言つた。

『出来上つたら旅客の通る邊の店へ、並べて見るのだ。確かに賣れる、賣れればお前さんの仕事にならうぢやないか。』

『そうですか、まアやつて見ますがね。』

まだ半信半疑である保藏を、叱るように誓眞は、製作の順序を教

えるのだつた。

保藏の家へ集る樵夫達は、皆誓眞から杓子を作ることを勵められた。誓眞も仲間となつて佛事の暇々を、工夫に費した。幾日かの後出来上つた杓子を集めて、店へ並べてみると、賣行は素晴らしかつた。

『へえッ、もう賣れましたか。こいつは妙だな。』

吃驚りする保藏へ、誓眞は賣上げの金を握らせてやつた。

『こんなに頂いていいのですかい、こいつは一つ打込んで、作つて見ませう。』

儲けを握ると氣込みは更に燃え、樵夫仲間に本腰を入れて杓子を作るものが多くなつた。

(六) 誓眞釣井

杓子を作る人、杓子を賣る店が、日と共に、島の町に殖えて行つた。

宮島杓子の名は海を渡つて、國々へ聞えて行き、この靈島に旅する者が一本を必ず土産として買つた。

誓眞はまた木竹をもつて茶具や酒器、筥などを作り、土産品の種類を豊かにした。島を富すものは、異色ある土産品を作るに若かずと、島の樹木に材を求めて、天稟に近い器用さを、發揮したのであ

る。

けれども、誓眞の、人を救ふ佛の業はこれに止らず、總ゆる生活の部面に涉つて、改善を試みた。

寛政五年の夏は稀に見る旱天續きの年だつた。

島の井戸は殆んど涸れ、山の水を引く竹樋までが破れる有様だつた。島民は水饑饉に悲鳴を上げてゐた。

誓眞は島の井戸を覗き廻つて、構造の缺陷を探つた。そして水の非常時に備へる、公用の井戸掘りを思ひ立つた。

彼は地形と水脈の關係を具に究め、千疊閣の下、幸町に地所を定めて掘り始めた。方六尺、石をもつて疊み上げ、底部の方圓を廣くした。満々と湛へた水質は純良を極め、近隣數十戸の民家が常用して、さらに水量の瘦せるを見なかつた。

「誓眞さんは、井戸掘りもやつてたのではないかな。」

島民は口々に、誓眞の多能に驚くのであつた。誓眞は、

「わしは佛の目で見、佛の心で考へやうとする、己を空しうして衆生の利に立つ時、凡俗の頭にも、彌陀の明智が宿るようぢや。」

と言つた。

續いて五ヶ所に掘つて、島民の用水を豊かにした。水質は良く炎天に涸れず、島民は「誓眞釣井」と呼んで靈氣に近いものをその井戸に感ずるのであつた。

誓眞は努めて貧しい者と交り、その生活を見た。そして佛陀の慈

心を一工一業の萌芽に見せて、貧しき人へ示そうとした。

(七) 彌陀の下僕

幾年か過ぎて、廣島の父甚介が、島へ誓眞を訪れて來た。

父は政治郎が去つてからの、店の商賣が思はしくないことを嘆き訴へるのであつた。

「もう一度お前に歸つて貰ひたいのだが、どうだろう。そうすればお前の好む嫁を迎へて、店のこと一切をお前に任せてしまひたい。」といふのだ。

家系の譽れを汚すまいと、一圖に固かつた甚介の心も、年と共に寂しくなり、優しかつた政治郎のことが思へて、堪らなくなつたのだ。

「俺は、お前と一ばん氣が合つてゐたのだ。お前を失ふことは、村上家の最後のやうに思へてならぬ。嫁のことで、お前を廣島から去らしたのは、俺が一生の不覺だつた。」

過ぎ去つたことを、目の邊りに手繰り寄せて、老ひの額に皺を刻ませた。

誓眞の胸に、戀人お芳の姿が夢のように浮んだが、心は更に亂れなかつた。肉身の父も、愛し合つた戀人も、現在は濟度の列に居並ぶ衆生の一人だつた。

「私は今、この島に佛の仕事を築かうとしてゐます。財産もなく、仕事も持たぬ人たちに、佛の慈悲を傳へたいと思ふのです。政治郎は今彌陀の下僕です。どうぞ諦めて下さい。」

柔かにいふ眞誓の言葉だったが、動かしがたい信念に満ちてゐた。幾年か見なかつた人間政治郎が、佛になりきつた姿に、甚介は打たれるのであつた。

「彌陀如來を信ずる者に、不幸はありません。貧しい人間政治郎を求められるよりも、彌陀の光りにお縋りになるのが、父上の幸です。」

眞誓の言葉に甚介は頷くばかりだつた。衆生に及ぶ法光の偉大さの前に、縮々たる肉身愛を訴へるのが氣耻しくなつた。

「それでは、島の人のためになつて上げてくれ、これ以上お前を煩しては、俺に罰が當る。」

と快く、甚介は獨り島を去つて行つたのであつた。

日本三景の一、安藝國嚴島の名産飯杓子、眞誓の發明した杓子は、寶暦年間、宮郷四郎兵衛なるものが、全国的に販路を考へ、大いに輸出の機運をつくつた。現今では、年産高一千萬本を超え、遠く異邦の同胞へまで供給されてゐる。

眞誓釣井は、今もなほ島に在つて、供水の用を持ち續けてゐる。

眞誓は寛政十二年八月六日、法臘三十五歳にして示寂した。(完)

家庭の知識

赤ちゃんのお耳垢

闇にまかせて赤ちゃんのお耳掃除をしてゐらつしやるお母さまを見受けますが、これは餘りよろしくありません。赤ちゃんのお耳垢は生理的に分泌される大切な脂です。この垢があるために外聴道内の皮膚に濕り氣を添へてなめらかにし、その上、外部から浸入する蟲や埃などを防ぐことが出来るので、この耳垢は赤ちゃんにとって大切な役目をもつてゐるものです。これも垢の効能です。どうか赤ちゃんのお耳掃除はたび／＼なさらないやうに願ひます。

なまぐさい手

魚のお料理をしますと、指先がなまぐさくなつて困るものです。これは洗つてもなかなかとれません。次のやうにしますと簡単にしかも手にとれるものです。兩手をさつと水の中に入れて、たゞざぶ／＼とふりうごかすだけです。決してこすつてはいけません。

ものは試し、是非一度やつてご覧なさいませ。

栗の皮

栗をゆで、から直ぐ水に入れ、二三分してから箆にあげて剥きますと漚皮がきれいにとれること妙です。しかし長く水に入れておきますと水っぽくなりますから御注意下さい。

佛說發句

古 荻 生

往時の佛宗が佛説につき題詠したもので面白と思ふたのを掲げて御慰みに供さう。

極古いところで連歌師といはれた守武が句に

散る花に南無阿彌陀佛と夕べか

な

これは古歌の夕暮の鐘に花をちりけりとあ
るのを洒落て花の散れる南無佛といふを夕
べと懸け調になしたものの花無常いかにも
四下の静かを云ふ得て居る

次はお山人形を愛した小西來山の句に

盗人の錢置く雪のやどりかな

之は一切衆生悉有佛性を題材として匠

んだもの、場面は泥的が雪の夜寒に計らず
悲惨な貧家へ窃み哀さみるに忍びなかつた

か、そつと錢を恵める様悉有佛性とは面白
い味ではあるまいか、盗人が錢置くは洒落
た句調なり

伊丹の鬼貫は談林風の作前、随分をかし
い事をいふ、爰に舉るは、煩惱あれば衆生
ありといふ題で、

燃ゆる火に灰うちまぜて念佛哉

句の表は干蘭盆の精靈祭の沙汰なれ
ど、而も燃ゆる火に灰まぜると煩惱修羅を
聞かせ、念佛とあるところ一切衆生の情
を含ませたと會得される。更に同じ題にて

骸骨の上をよそふて花見かな

之は人の知る句で、花見かなは衆衆が下
界に浮れ興する所、だれもく、骸骨の上
を飾る煩惱の見苦しさをいへり、前の念佛
とあるより一段洒落味がある。

芭蕉の兩手といはれた一人嵐雪の句で

ある、之は深着世界無惠心を題として匠
だのは

勤めよと親もあたらぬ火燵哉

寒さ烈しきに火燵に温まる嬉しさは何
人も好めるなるを、夜延べ仕事に追はれて
は、此親仁さへ我慢して居るのに若い身そ
らで意氣地無しとの叱言、彼我とも世の辛
さに惠心の無きも惱ましき限りであらう
芭蕉の十哲に算へらるゝ尾張の越人が、
三界無安猶如火宅と云のを詠して居る

六月の汗ぬぐひ居る臺かな

灼熱の野天、うてなとあれば小高い場
立ちては颯天を照りつけられ汗の涌き出る
三界の火宅と形容されたは、納得すべき句
ならずや。

俳諧七部集によく載つてある者其の句に

見ると、傘下が無常迅速を軽く解し能く
ふて居る。

咲つ散つ隙なき芥子の畑かな

僅花一日の榮をいふよりも、芥子ほど咲
くに、散るに、一層果敢無い花はあるまい。
即ち是れ無常の速かなるに均し。

(おはり)



信 仰 の 體 験 を 語 る

應募原稿

「一枚起請文」の熱講を讀むまで

大阪 福田 定雄

僕は現在深い胸の病にかかつてゐる。何時の日か、僕の古い日記帳には、血痰に驚かされてもう五年……と云ふ俳句ではないがそんな句を書き止めてある。あれから更に二年経つてゐる。すると僕が血痰を吐きかけて七年。五年でさへ既に足下に迫つてゐる死を思ふて泣きさうになつて、あんな句を書いた。しかしまだ死なないで生きてゐる。勿論この

後、何時まで生られるか知らない。併し、たと殘念に思ふのは、血痰を吐きかけて七年も生きのびる力があるのだつたら、今になつて僕は、もつと根本的な病源封閉策を講じなかつたかと口惜しい氣がする。罹病當初、肺病は死ぬものとはかり思つて、何年も後のことは考へられなかつた。しかも可成り調子か快くなつてからも、僕の心底にはいづれ死ぬの

だからと云つた一種の投げやりな感が動かなくなつた。その癖、熱が高くなつたり、また咯血をやると、投げやりな態度のまゝ死を肯定出来なかつた。「命がどんなにしても欲しい」それは當前だ。そこで僕は今日になつて「あゝこんなに七年も生きるのだつたら、そのつもりで田舎にでも遣入つて、ゲーテのやうに長久の策をとつて、生れ變つたやうな體質になりたかつたと思つた。人も知るゲーテは若き頃肺病になり、十數年間田舎に歸つて療養し、しかる後、あの文學的著作をしたと云ふ。僕はこの天才の泰山の如き確固たる精神に驚いた。しかし氣がついて見ればもう晚い。否、晩くないにしても、現在までの僕の療養生活は、意味のないものであつたのだ。それが何よりも僕には情ない氣がする。加ふるに、七年前と今日とは、血痰の出方が違ふ

七年前は、痰の中に血痰の部分が混つてゐたのであるが、今では痰全部が血痰であるだから、七年前の死を想ふた時よりも、現在死を想ふ方が深刻である。また當つてゐるかも知れない。最近三年間、殊に夜分禁足状態である。一切が悪い。

僕は自分の病養生活の失敗が何處にあるのか、最近靜かに考へて見る時があつた。何んと云つてもゲーテの態度には重厚な精神力を感じられる。僕のそれは一日一日が死を怖れるの餘りおど／＼しながら生きて來た。ゲーテと自分とは勿論問題にならぬ話であるが、しかし問題は比較にならぬと云つて捨てられる問題ではないことである。僕はここに至つて、過去自分の七年の病養生活の失敗は自分の宗教的信念の大なる缺除によるものと斷定した。ここで斷定と云ふ言葉は變な感じを與へぬでもないが、怖々ながら、毎日血痰を吐きながら七年の間生きて來た僕は、自分の宗教心に依つてさへ生きて來たと思

つてゐたのでもあるが、今その心持すら眞實の力ある宗教心から遠いものとして、結局無かつたものと云ふ意味から斷定したと云ふのである。僕は無論これを轉機として宗教的信仰へ這入ることに至らない。宗教的信仰の幾段階と云ふものが見えはじめたわけである。

信仰の諸段階といふものが、分明かけた僕は、當然力の及ぶかぎり、その高い所へ目掛けて精進すべきである。理窟でなくて、僕の病氣に對する觀念を、慰めて呉れるものがそこにあるやうに思ふ。僕は次第に宗教的信仰に深くなつて行く自分を見つめてゐる。氣持の上では、信仰の結果、科學では説明することの出來ない奇蹟が行はれると云ふことも信じ得る。

しかしさう云ふ奇蹟から信仰へ動機をもつた僕ではないから、書物と體驗を一つ一つ重ねて行くことによつて、對象に近づくと思

つてゐる。僕にはこれが自然である。現在でも今話したやうな、小さな體驗が横たはつてゐるのである。

自分のこれは「信仰の體驗」談ではなく「信仰への體驗」談である。それも非常に徐々である。その矢先、「淨土」が創刊された。宗教復興の加減でもあらうが、僕の友達間では既に半年も前から坐禪をするものもあつたがそれには僕はもう一つ氣がすゝまなかつた。偏頗な理窟であるが、僕などの門外不出で病養するものには、一つの坐禪をやつてゐるものもある。僕の欲してゐるものはそんなものではなかつた。その欲求の下に僕が貪り讀んだのは「淨土」の「一枚起請文講義」である。僕がどの程度に理解したか、尙ここにも把握の階段と實踐の階段とがあるが、それは今後の僕の問題であるとして、この熟講によつて僕は宗教的信仰への或る程度纏つた發心を授けられたことを告白する。

鳩摩羅什

羅什三藏とも云ふ。龜茲國の人。姚秦の興王、涼を討つて羅什を得、長安に迎へて國師の禮を取る。翻譯經凡そ三百八十餘卷なり。

四紙經

四枚の紙に收まる故に。

姚秦

東晉の時、苻堅と云ふものが、晉の大部分を占領して大秦と云ふ國を立てた。それを姚萔と云ふものが、苻堅を亡ぼして國の名を更めず、やはり大秦と云つたので、二つを區別する爲に、前のを前秦と云ひ、後のを後秦又は姚秦と云ふ習ひにして居る。

佛說阿彌陀經講義 (一)

中村 辨 康

(一) はしがき

信仰が無かつた時、阿彌陀經を讀んで何の感銘も起らなかつた。隨分淺薄なつまらない御經だとも思つた。

極樂のことと念佛のことが書いてある丈で理論的な内容がない。こんなのが何で重要なのかサツバリ判らなかつたのである。

だが、信仰に入つてから能く味つて見ると本當に滋味に富んだ實踐的なよい本だと云ふことが、段々判つて來た。信仰的な意味に於ては實に汲めども盡せぬ泉でさへある。

偕て、一般に用ゐられて居る漢譯阿彌陀經は、翻譯者として著名な鳩摩羅什と云ふ人が姚秦の第二世姚興王の命を承けて譯したもので、小無量壽經、小經、四紙經などの異名がある。

望月博士の調査に依ると、此經の註釋書は百三十六種からある。それに新らしいのを加へたら餘程の數に上る事であらう。

殊に近來支那佛教界に於ては、此阿彌陀經の講説が大流行で、印光法師、大虛法師を始め單行本や

印光法師

現在の人、實踐

派の隨一

大虛法師

現在の人、中華

民國佛教界の重

鎮

序分

前かきのこと

正宗分

中心となるもの

流通分

あとがきのこと

涅槃經

釋尊最後の説法

なりと云ふ小乘

大乘兩傳あり。

結經

前を結ぶ爲のもの

の結論に均し

舍利弗

舍利子とも云

ふ、舍利は母の

名、驚驚と譯す。

目の美しき鳥な

りと、釋尊最初

の弟子なり、五

比丘の一人、馬

勝に會ひ釋尊に

投じ、教團第一

の長老となる。

雜誌に色々な人の講義が出て、中華民國の出版界を賑かして居るさうである。

羅什の阿彌陀經は一千八百九十一字からなる。

今之を一句一句説明する譯には行かない。昔しの人には之を九十四科に分けてこまかく説明して居る

が、超スピード時代にそんな眞似をして居たらスツカリ倦きられて仕舞ふであらう。だから六回に分

けて其大綱文を擲んで見やうと思つて居る。

どんな御經でも先づ最初に三分して居る。序分、正宗分、流通分の三である。

序分と云ふのは場所とか聽衆とか由來とか云ふやうな前書きであり、流通分は講話後の狀況、聽衆

の心持などを云つて居るのだから、中心は第二の正宗分にある。正宗とは正しき宗と云ふ意味であ

る。

また大概の經典には聽衆の中の誰かとの問答が交つて居るが、此經にはそれが無いので「無問自説

經」とか「隨自意經」とか云はれても居る。即ち他の經典と違つて此經は釋尊が御自分の本心から云

ひたくて語られたものであり、且つ涅槃經を御説きになつた後の最後の「結經」と云ふ可きものだ

などとも云つて居る。其上御弟子の中の智慧第一と云はれた舍利弗尊者を相手にして

「舍利弗よ。舍利弗よ」

と三十六遍も舍利弗の名を呼んでは注意を喚起し、叮嚀に念佛を勧められたと云ふ最も意味の深い御

經だとも云つて居る。

何しろ智慧第一と云はれた理智のすぐれた舍利弗に、理論拔きの具體的な實踐法を説いたのである

から、其處に興味の盡きないものがあらうと思ふ。

それは信仰と云ふものは畢竟生じつかの智恵や理論の上にあるものでなく、理論の中から生れるものでないことを物語つて居るからである。

恰度、法然上人が「智恵第一」と云はれる程の徹底的な智者であつたからこそ、念佛の信仰に徹底されたのと同じ轍なことである。

「大賢は大愚に似たり」

と云ふ言葉もある。智恵第一の舍利弗が唯々諸々として黙つて釋尊の御話に聞き惚れて居た姿が彷彿として見えるやうではないか。

此御經の中に釋尊が

「舍利弗よ、御前は何う思ふ？」

と云ふ問が二三度出て来るが、其度毎に釋尊は舍利弗の答を待たず、直に言葉を續けられて「之れはかうである」

と、自分で答へて居られる程、舍利弗が深く聞き入つて居たのである。

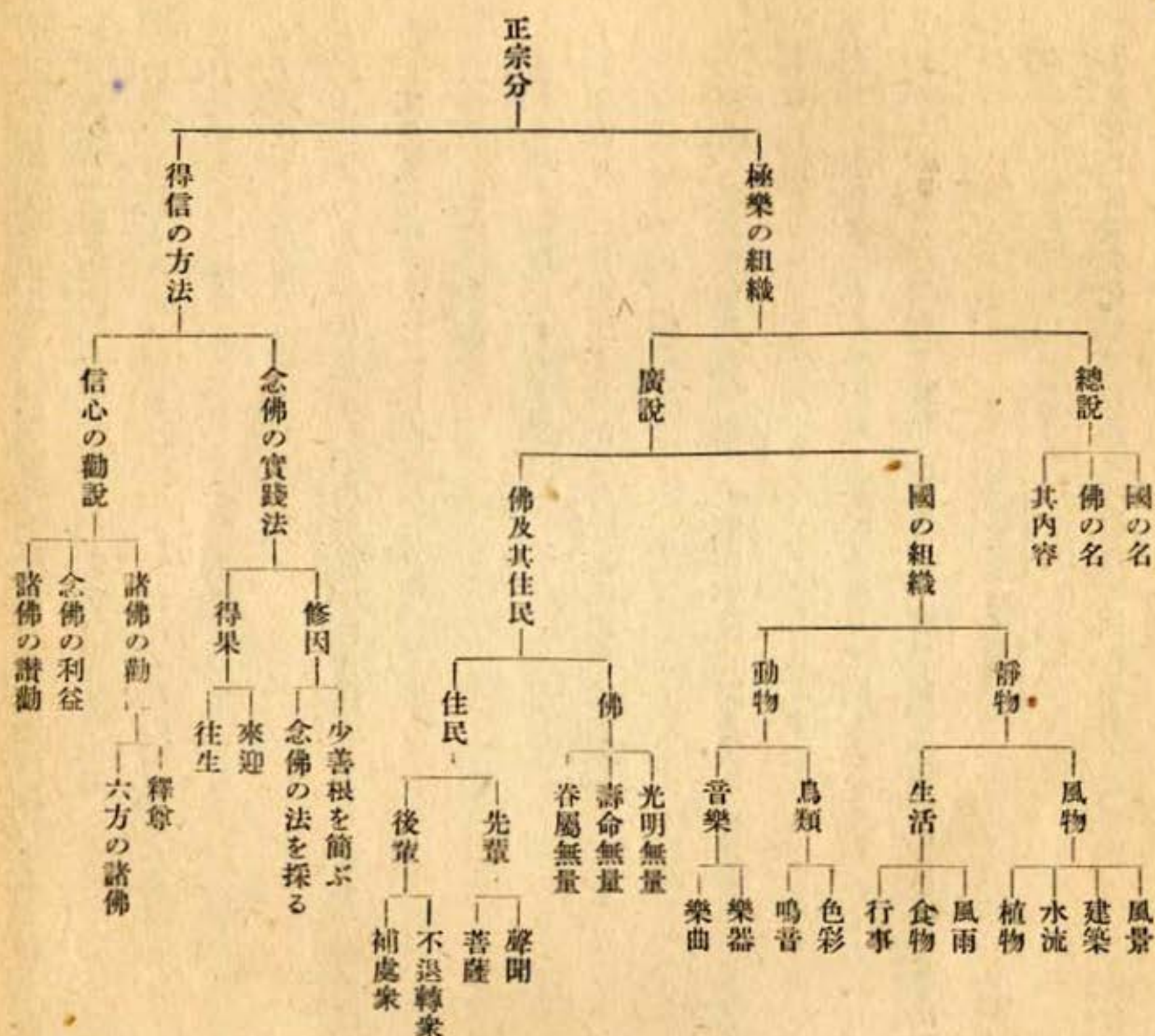
「智者は惑はず」

である。大智者であつたからこそ唯々として聞入つて居たのであらう。

だから、私達も惑はずに、釋尊の説かれた阿彌陀經の眞意に傾倒しやうではないか。

(二) 阿彌陀經の構成

此經の構成を圖にして見ると次のやうになる。



少し細く分け過ぎた感があるが、大體之で盡きて居ると思ふ。

つまり極樂と云ふ處が何處であるか、其の主たる阿彌陀佛の名が何うして付けられて居るか、そして其極樂を獲得する方法、極樂の主たる阿彌陀佛に歸一する方法として（それは全佛敎の要求する正覺と涅槃とを得ることであるが）念佛の仕方及び其利益とが説かれて居るのに外ならないのである。

阿彌陀佛の本願の事を説いた大無量壽經と極樂の事を細説した觀無量壽經と此經とを合せて淨土の三部作として居

指方

方向を定むること

立相

姿をきめること

寂光淨土

常寂光土——天台宗、日蓮宗などに云ふ淨土

密嚴淨土

秘密に莊嚴せられたる淨土と云ふ意——眞言宗などに云ふ

る。然し實は阿彌陀佛のことは色々の經典に出て居て、支那の妙樂大師は「諸經讀するところ、多く彌陀にあり」と感嘆して居る位であるから三部經のみに限つて居る譯ではない。

(三) 西方十萬億土と云ふ意味

阿彌陀經は正しくは「極樂と名ける」と云ふところから初まる。

即ち「是れより西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり名けて極樂と云ふ」と云ふのである。所謂「指方立相論」のむつかしい議論のある個所である。

一般的には佛の世界を淨土と云つて居る。大ざつばに云へば清き世界と云ふ意味である。之れに色々な名が冠せられて居る。例へば

寂光淨土——理智的（理智の極まるところ無生の光常に輝く）

密嚴淨土——感覺的（三昧の心眼に依て莊嚴極りなきを見る）

安養淨土——人格的（安らかなる中に最高の人格を養ふ）

極樂淨土——感情的（感情の苦惱無く唯だ歡喜のみあり）

此外にもまだあるけれども、要するに淨土の一表現である。

また大無量壽經では「安樂」と云つて居るが、之れは翻譯の相違に過ぎないもので、須菩提の義譯である。法華經を始めとして色々の經典では多く「極樂」と譯して居る。直譯すれば「樂みあり」と云ふことださうである。

今ま初めに「從是西方」と斷はつて、次に「過十萬億佛土、有世界、名曰極樂」と云つて居る。だ

恢廓廣大
恢廓曠蕩

共にひろやかな
る意味

超勝獨妙

他に立ちまさつ
て居ること

去茲不遠

こゝを去ること
遠からずと讀む

北俱盧洲

ウツタラ・クル
といふ。北の方
にマラヤ山を越
えたる奥にあり
て、他人の到る

から問題は「西方」と云ふことと「過十萬億佛土」との二つを別々に吟味しなければならぬ。

元來極樂は「無方」とも云つて居る。大無量壽經には「恢廓廣大超勝獨妙」とか「恢廓曠蕩不可限極」などと云つて限極なき世界とも云つて居るから、大宇宙全體を意味して居て十方の何れを向いてもよい譯である。然るに「西方」と限つたのは相當の理由が無ければならぬ。また既に無方であり不可限極であるならば「過十萬億佛土」と云ふことも要らない譯である。觀無量壽經には「去茲不遠」とも云つて居る。之れを「過十萬億土」と限定したのだから頗る變である。

然しそれは何でもないのである。

斷はる迄もなく「淨土」は私達に取つては理想の世界である。だから理想の世界を決定する迄と、理想の世界其ものの内容との、二つに問題を分けて考へなければならぬのに、それをゴツチャにして考へるから、終にコンガラがつて地理的な意味を交ぜて見たがるのである。

私達は物質の世界に住み馴れて居る。隨て理想の世界を決定しやうとするにも、何うしても具體的な場所を考へて見やうとして居る。かくて場所が考へられるならば、方向とか距離とかが聯想される。其處で「西方」と云ふことがきまり「過十萬億土」が云はれなくてはならぬことになるのである。

佛教已前の婆羅門教に於ける理想世界は北俱盧洲と云ふ北の方である。梵天などの天の世界は上方である。上方は向上を意味し下方は墮落を意味する。また東西南北の意味も

東方——出發(初生)——發心——春(芽)
南方——修養(現在)——修行——夏(育)

こと能はざる美
しき國なりと傳
ふ。

梵天

ブラーフマンと
云ふ。婆羅門教
の天地創造神な
り。

盧舍那佛

報身佛、淨滿と
譯す。或は毘盧
遮那佛の略名と
するものもあ
り。

蓮華臺

蓮華藏世界のこ

西方——完成(目的)——菩提——秋(實)
北方——終滅(死亡)——涅槃——冬(收)

の如き配當がなされて居る。だから上方北方は他教との混同を避け、東南北下の四方も理想的でない
とすれば残るものは唯だ西方のみである。即ち西方は完全を意味し、實りを意味し、目的を意味して
居る譯である。

次に「過十萬億佛土」とは一切の世界に超過して居る意味である。

佛教では「一佛土」を「三千大千世界」と云つて居る。一太陽系を一世界として之れを千倍したの
が「一小千世界」それをまた千倍したのが「一中千世界」それを更に千倍したのが「一三千大千世界」
である。

$$1000 \times 1000 \times 1000 = 1000000000 \dots\dots\dots \text{佛世界}$$

之を十萬億倍したと見てもよし、亦た位取りで十萬を億の位とすれば之で一萬億になるから夫れへ東
西南北上下四隅の十を掛けると十萬億ともなる。

また梵網經と云ふ御經には

「我今盧舍那(佛)方に蓮華臺に坐す。周布せる千華の上に復千の釋迦を現す。一華に百億の國あ
りて一國に一釋迦在り。各菩提樹に坐して一時に佛道を成ず。是の如き千と百億とは盧舍那の本身
なり」

と云つて居るが、是に依ると百億の千倍即ち十萬億の上に立つものが盧舍那佛の世界であり、十萬億
の夫れ夫れの一釋迦佛土を統轄するものが盧舍那佛の淨土と云ふ事になる。して見れば「過十萬億佛

と。大宇宙を表
象す

那由他

數の名、日本の
億に當る。億に
十萬、百萬、千
萬の三等あり。

恒河沙

ガンヂス河の砂
の數。

由旬

國王一日の行程
なり。或は四十
里（六町一里）
又は三十里とも
云ふ。

土」とは横とか堅とかの問題ではなく、全體を引きくるめて一切の世界の最上位にある理想の世界を云つて居ることになる。

こんな計算を今更らしく書き立てるのは、實に愚にも付かぬことで、信仰的には何の多足にもならない。私達迷へる者に取つては十萬億などの騒ぎではなく、夢想さへ出来ない距りであるが信眼から見れば目前の理想世界である。或人の道歌に

極樂は佛の高さ六十萬、十萬億の西向の堂

と云ふのがある。觀無量壽經に「佛身の高さ六十萬億那由他恒河沙由旬なり」とある全く想像も及ばない程の大きな佛様であるから、十萬億佛土位の距りがあつて恰度拜み頃だと云ふのである。つまり信仰的には十萬億の距りがあつても同じ部屋に居ると同様であると云ふ氣持である。

茲まで來れば、十萬億と云ふ事が距離の問題だとしても何のむつかしい事はない。即ち

信ぜざれば十萬億、信ずれば目前

だからである。

初めにも云つたやうに「極樂淨土」とは淨土の感情的表現である。惱める者、苦しめる者に取つて唯一の安住所とする世界である。

然し其内容に至つては非常に積極的なものがある。それは追々此經の中に説明されて來るが、今は苦惱の多い人々へ先づ第一印象を與へる爲に

「其國の衆生衆苦あることなく但諸樂を受くるのみなるが故に極樂と名ける」

とズバリと云ひ切つて居るのである。

愛樂無間

楽しみ極りなき
こと。

然かも他の經典には

「其國の受樂無間なることを聞き、横着な氣持から樂をしたいなどと考へて往生を望むならそれは

とても駄目なことである」

と斷つて居るが、此經でも

「其土に佛有り阿彌陀と號す、今現に在て說法す」

と云つて居る。即ち「常に佛の說法を聞く」のである。つまり絶え間なく智識を受け入れて常に覺醒

生活を實行して行くのである。

私達人間の世界にしても、享樂ばかりでは誰にしても恐く嫌やになつて仕舞ふであらう。感能的

な樂みは本當の樂みではない。なれは唯だ一時的なごまかしに過ぎないからである。本當の愉快は面

白いやうにズンズン仕事の出來て行く事である。何の沈滞もなく何の嫌怠もなくチャンチャン仕事を

してそれが着々と實効を奏して行く處に本心の悦びがある。そしてそれが永遠に續けられて行く處に

心からなる歡喜がある。

それが阿彌陀に歸一する所以であり、極樂に生ぜんと願ふ理由でもある。(つゞく)

(本文)

佛說阿彌陀經

如是我聞、一時佛在、舍衛國、祇樹給孤獨園、與大比丘衆、千二百五十人俱、皆是大阿羅漢、衆所
知識、長老舍利弗、(中略)阿菟樓駄如是等、諸大弟子、并諸菩薩摩訶薩、文殊師利法王子、(中略)

與如是等、諸大菩薩、及釋提桓因等、無量諸天大衆俱。(以上序分)

爾時佛告、長老舍利弗、從是西方、過十萬億佛土、有世界、名曰極樂、其土有佛、號阿彌陀、今現
在說法、舍利弗、彼土何故名爲極樂、其國衆生、無有衆苦、但受諸樂、故名極樂。(以上總說)

編輯後記

◆毎月豫定よりも會員増加率がずつと多くなるので、月中に申込まれた讀者には、本月號賣切れの御通知をしなければならぬ始末で、眞に申譯のない次第です。殊に十月は雑誌賣切れ後の會員申込みが澤山あり、それ等の方への配本は十一月號からになりますから誌上でその旨御斷り申して置きます。今後は部数もずつと増して用意して置きます故、續々御申込下さい。會員諸賢の一層の御活躍を期待いたしております。

◆各地に於ける本會支部の活躍は目覺しいものがあり、東北、北海道、九州、奈良、大阪、京都

等々に支部聯合會が華々しく結成され、本月は中村、眞野兩師の關西地方遊説等、本部事務所は文字通り目のまわる忙しきだ。

◆本號には、井上哲次郎博士の御講話を始め、淨土宗の中野善英師、曹洞宗の山田靈林師、天臺宗二宮守人師による「信仰と修養講

座」、中村辨康師「佛說阿彌陀經講義」宇野浩二氏の「旅路の芭蕉」等の本誌ならではの見られない獨特の讀物を取り揃へました。いづれも讀者諸賢に限りなき満足と與へるものと自負しております。尙、子供欄は筆者の都合により、今月は休載いたします。

『信仰體驗談』を募集します。

苦境に立つた時、私達の魂に呼びかけるもの——どん底の悩みにあへいでゐる時、私達の行衛に一條の光明を齎すもの——失意の人に勇氣と信念を與へ、再起に振ひ立てるもの——惑亂と懊惱の渦中に安心の境地を齎すもの——生活の波濤の中で燈臺の如く我等の行衛を指し示すものではありませんか。元來それは貴方お一人だけが藏つておくべきものではないのだから。

- なるべく四百字詰原稿紙六枚以内。
- 貴方自身の體驗になるものとは限らないが、可成今生きてゐる事實を具體的に書下さい。
- 毎月七日迄に到着したものの中から選んで、翌月號の紙上に發表します。
- 原稿の取扱は編輯部に御一任下さい。
- 封筒の表に『信仰體驗談』と朱書して下さい。
- 掲載の分には薄謝を呈します。

淨土 十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和十年十月三十日印刷納本
昭和十年十二月一日發行

(定價金十錢)

品川區南品川四丁目三七八
編輯兼 佐藤 賢順
發行人

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ヶ年 金一圓
(送料不要)

右の一ヶ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。然し入會申込みと同時に一圓御納めになれば、「淨土」及び月刊新聞「法然續仰」が一ヶ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

法然上人の 信仰生活

中村辨康 著 四一六頁 定價 三十錢 送料 二錢

法然上人の辿り給ひし信仰の
道こそわれらがしるべなり！

信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間の本當の姿を最も輝かしく明瞭に現はした人間の精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心の萌芽に開花の時を與へた慈雨でもある。故に若しそれ等巨人生活の内부를覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識に捨て、省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如燦然として輝く向上の珠玉を見出し、貪しく思はれた己れの生活が豊富な内容に充たされてゐるのを再發見して驚嘆するのは當然である。

法然上人の巨大にして無双な求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

著者の言葉——精魂をつか

つらしめて求めに求めた三十

年の求道生活とその當時のあ

らゆる階級の人達を魅し盡し

た四十年の信仰生活とが何ん

なに近代人の胸を突くかを振

りかへて見たいと思ふ。

法然上人

大正大 大野法道著 四六判 拾五錢 (送料 二錢)

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その翹々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかない。！

◆ 發行所 法然上人鑽仰會 ◆

ぜんそく苦に

専門薬

イワミドリン

奏効顯著
副作用絶無



試薬進呈 淨土讀者に限り、發賣元へハガキで御申越次第試薬（三十錢分）無代贈呈いたします。

秋から冬にかけての苦しい喘息發作の豫防と治療に、イワミドリンを推奨します。本剤は植物性有効成分を抽出合成せる専門薬で、ヒイ／＼する程の發作も服用後五分間で和ぎ、患者を安靜せしむるのみならず、漸次病根に作用して治療の目的に導き、絶對副作用なく發作を豫防いたします。その實効を先づ試薬により御實驗下さい。自信あればこそその試薬進呈です。

薬價 五十錢、一圓、二圓、三圓、五圓
十圓（有名藥店にあり）

大木五福園本舖
マワーブラスター

大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三
振替口座東京五四〇番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十年十月廿日印刷納本 昭和十年十一月一日發行

淨

土

第一卷 第七號

定價金十錢（送料一錢）